国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10

ガラス使用

856-10

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

まりうえ光よりのこもりなひろひ
おやまうらはゆくもりもうい先達のまく
さしそ申うざれい後生のうもづく。うん
おもうさえばうんや。つわよ景躰をや
そうおもを筆者にのごて。ゐる餘
情とゐづくうこうまうのり
字ゐのち納言物語云。今ハむり。誠
前守為時とてくそのこ。世よめでくく
やまうりけうへい。むうさえ式ごお
やしこの為時。源氏いけうまうの。
こ角うのうことでもを。むととあけうせた
つまけうとぞ。さんいのうよけうこ純ゆ
そて。むととあ純めいぶたりひ。
源氏つくりうこと。さ角ぐたつく
よりすいりそのちつくりうよりもも。
いづもうまくうん

一項源院滞記義
二年一切物語難多或有
或記夏之伊勢物語詞拙夏のけ事と
也上手めき。詞殊勝之大和言下の芳
其外皆以何物語盡もふ覚之其途
故之源氏物語いふ可説物之更非俊
之処為菜式ア書之。始一條院有二御
覧一不可説物之式ア日本記をそ
よくうくうれと云作手取たゆ
内侍始ハ論言号日本記御局云誠
諸道諸藝皆縮二此一篇一不可説未曽
有下説。源氏哥い芳之狭衣哥よ純
けまくと云人ありと云ハ条心浮漾猥
夏之更非同日論議狭衣哥しもの
不思いけまでも。源氏哥よ不可及
雲泥之。凡哥道い知与不知水火者之
源氏い才一つい詞つづき。非人名処為不

可説哀〻并二哥数是又何人及
之并三位拾〻沙汰云盡優美也
又哀もいろ〻べし但未見哥又不可
説〻但是は我朝究上〻詞也兎角
之処為物〻未知子細之奉不可申
況凡古今後撰為二本意時則一条
院以〻とり〻拾〻非二普通の物欤
一河海序云光源氏は寛弘一条院のそれ
也云〻康和堀川院のとき也よしろまりの
ことく略之
同抄よしけりのうらのおくり波〻
うらしまつ〻も西宮の左大臣安和二年
左遷を帥よしたゆきとされ給しを
哀哉と思ふくもりなき也てなり
ひるけさけふしは大井川撰者内親王
村上女十宮
より上東門院へ〻づ〻ろ〻ろ〻よ

やそくさ〻よろづ〻ろ〻を給けるまゝ
〻かとり花のたもとはいつるれ〻ぬ
わすしくうつりいでてそまつらべ
きうき事よおのとされ〻それ〻そ
幸は通ひてこのよ成いのりに
おろしも八月十あまの夜湖水まう
つり心のとゝまりつゝ海にあそびつゝ
風情有にうちひけうをとゝのへさ
さはやかにて仏前にありけり大般若の
料紙を本ゝるよりはじめてすべて
わかのあまをとゝさ〻でめり見
ゆるまでいと中〻興
ありけりやおはしてとゝのへさせ
後よ罪障懺悔のために般若一部六
百巻をとゝのへ奉納しけ
ほのかにかのことありやとて光源氏を

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

たちよるぞ〳〵。世のよ[illegible]或ひと[illegible]
よりそうて。周公旦白楽天のいめ[illegible]
かんが〳〵。在納言業平朝臣のよりて
てうさいづ〳〵いうるべ。そのら[illegible]
よ云かて五十てはよりてなりし
城。行大納言行成よ[illegible]
当て。称宮へまいりとれひうよはぬ
寺入道関白。奥書とかゝれて云。けは
流。世尊或ひとが作とのこありつう光源氏
物をかゝることゝ云。誠よ来世の
良仁義の道。好色の無善根の縁よ
いうものでは思ふとのとびいふこのし
甚もとりしき。荘子の高言よおなじき
り其の詞の妖艶さ[illegible]に勧るの一
アのみよ。世尊の変をもとれてきく
でなく有よ。況或ひとの作をいうとて。

甚或ひとが号をとれけり。一説云。源氏
ひと名出をるべ。そて。嫁よ夫の家のゆ
うりよ。甚のそよにいうふうとこく
或説云。一条院のはゝひとこのゝ上東
門院へまいらとて。我ゆうのと
のうり。あくれとおぐりめとと中ほと
ひびうよりうてけるあり。或書ひと云
ぞるうもいつう
物語の取代い醍醐。朱雀。村上三代よ准
すう次。桐壺帝門い。延喜。朱雀院。天慶
冷泉院い天暦。光源氏い西宮左大臣必
代和尚とうく
一説宣云の母い。寛平法皇の皇女。延喜
帝の御嫁ぐ。妓仕左大臣の母し。桐壺帝門の
北後とあり。は外甚御おとう誠よ
云。前の准拠。誠よ也いうへいも

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

以物語光源氏をしてすうさしむれば
西宮左大臣よ准ずる文一世の源氏也
還の法の桐壺一けまても。故ある御
先達といひてさしばくやの今の
物語の祭よ世通とむらう故。答曰。
つゝり物語のやうに大綱の甚くの物と
うげあまごと。行法よ。ささていあのが
ちよくにかれを摸ゝとしる。流
朝の書精春秋史記るぐいよ実録な
ゆく有実同歟

一桐壺帝冷泉院を迎ゝ天暦よるぐく
をるぐく或ハ唐のまゝのみうさ
そいさ。或ハ秦始皇のくれしう例を
ふゝとう。又天慶の門の相續の皇胤お
りゆゝわざも。いまのぐりよ。朱雀
院の御後冷泉院の御後ゝ

或説曰此条有作者意趣歟云々光源氏ゝも安和の左府
よりゝゝとゝいふ。也。如何。先
なるべきよ。並中将の見ゝまねして。
五條二条の名を院雲の女院勝月
夜の尊侍ゝゝ。或いふこのお将
のそうりをおゝり。又ゝ上天皇の
号も。源家よの名の旧躅本
朝よの事壁王みお先蹤を摸ゝ
歟。是作物語の習ゝ。ゝゝいづ
れ時にゝゝ。分明ゝ書ゆゝぐも
此殿ゝ。名ゝ当下よの延喜の御時ゝゝ
ゆゝとふくめり。此外或ゝ桓武一条院
と桐壺御門よ准じ。又内大臣伊周
公を光源氏よ擬ゝゝゝ一義も
ゝ歟皆以謬説ゝ。若桓武とゝゝ甚
以後の帝王陽成宇多。延喜の御名

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

物語よりハ一条院をハじめ奉りて後五代のほどの事ども、はぶきつゞけられたるハいとすくなく、千枝つれのよりあつめ人、柴萩村とかの作りもうけて、一条院までハ書士ども、所〻にとゞめ、一条院より後ハ、かの作りもうけたる人〻の家〻の集ども、又法令の集どもより、柴萩院を当代紫式部之作ニ無異論事

一此物語ハ本一やうならず、行成卿自筆の本も、悉今世よりハ絶つゝ、伊房光行八本をとりて校合取捨して、家本ハ、かの取謂二条冷泉中納言朝隆本、堀河左大臣後房本（号黄表紙）、従一位藤原伊房左大臣筆跡、法性寺関白本（唐紙小双名号尚侍殿本）、五条三位後成本、京極中納言宗家本（号青表紙）等ニ、各雖諸本皆有異同、私勘合古本

且可加ニ予見者耶、善者従之、古今之美也

一黄表紙　後成卿　青表紙　宗家卿　二条家

用之奥入汁ものてもも〻已達処為〻ニ為相母（阿佛）為氏継母ニ奥入を加へ、それハ宗家ニて註を加へたるとき、一河内本、河内守光行八本を以て校合取捨して家の本ハ、すくなきの一筆ニて、母常陸介藤原為信女　上東門院女房或雁鳥司殿女房

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

て。大貳三位弁局。按衣作者を定め。旧説八正親町以南京極西頬今東小院の内也。院は。上東門院。れ処之法之。文式ア墓所也。雲林院。白毫院南。小野皇墓等西なり

一源氏をとうして心をしづめ。盛者必衰の心を守りて。見悪をしりて。八。好色のごとくにしづかにふるまふ。源氏をば。統なりして可見。一凡五十巻。此の巻よりの事あり。一の詞をとり。二の詞をとり。三よく句や哥の二をとり。四ものく哥にも詞をもちゐる。此名をとる。天台の教一代諦法門を二の有門。二の空門。三の亦有亦空門。四の非有非空門也。一切の云教。此諦より出。

よりて。故に諦外別立法性をも不立。真實の道理。言教のみにしてなづむ事なかれ

一巻桐壺　句を名とる

桐壺八潘景舎也。十郎曹司。よりて。光源氏の母隣息所を。桐壺更衣といふ。仍巻名より一名壺前栽。詞よき本の巻末栽の盛也。おもしろき

二の巻帚木　うつせみを名とる

けしきばかりをきゝてその家の道のやうくゆゑしめるかな

箒一室塵　縦のごとく横のごとくびく哥を名とる

空蝉のごとくにうつせみの木のもとにたゝずむうつゝなれ

巻の名のよしうつゝの物がたり二の巻。春日祭又男五。吹上巻等

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

さそはれてそらう
九 源宁　哥と句とをそととり
わかまつのねのやもゐるみんなよ
のうぐひすもうぐひすもう
十 明石　哥と句とをそととり
あげさうて明石の浦よ釣舟のよや
やしまをおりひやふるふ
十一 澪標　うぬぬぬぬととり
うねづくしみをつくしにまでよ
やづりあひけうそうのふうの
并一筆啓　接のうぐひす哥や句とをととり
引きてもわすれてこのあみちもうくふる
うものごとしもとの心を
并二関屋　旅のうぐひす句をそととり
関屋よりばうぐひすも出うぐひすが
たどもあり

十二 絵合　句をそととり
此巻には法令しけぐさくさ詞うるひ
出でいろいろのあそれよふうは名
うぐひすをあくせめしわり私の
句あり浅拾遺集の句よ正しき内裏
絵合の夏そくり
十三 松風　哥や句をそととり
为とうて猪くわうたうよさくしに
みくらわたどぐめく
十四 薄雲　うたをそととり
八日さし峯よりれびく薄雲ハ地
そあ袖よろやまぐる
十五 槿　哥とうぐひすそととり
うねりのおりとれめ槿の芸れさ
りいすぐやちめんん
十六 乙女　うたや句とそととり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

心女御も秋こびめ〳〵て住神のさ
世のもようひ〳〵めもで
十七玉鬘　哥とそゝとり
音ともゝ多いそれるまでむろつゝ
なるすゝとゑ〳〵さめゝん
并一初音　緑のるゝび　哥と句とゝとり
夏月をねよひれそゝみゝよゝ萬の
ゝつ〳〵さりとよ
并二胡蝶　緑のるゝび　哥や句をゝとり
ゑそのゝそゝふとさゝやきそゝよし秋
まのつ思いゝゝくゝゝん
并三螢　緑のるゝび　哥や句ゝとり
色いをで分とのゝこゝび堂〳〵そゝよ
つゝまゝるなりひるゝめ
并四常夏　緑のるゝび　哥や花ゝとり
ゑゞ〳〵このゝゝゝさゝとゝゝを

このゝそれとゝやゑゝん
并五篇火　緑のるゝび　哥や句ゝとり
篇ゞよゝゝゝふ音のゝゝりそ世ゝい
ゝしまめゝのはぬそれ
并六條の分　緑のるゝび　句とゝとり
ゆゝゞ何のゝ〳〵りゝゝり
并七御幸　緑のるゝび　哥ゝとり
ゝゝさゝ〳〵あさゞりをゝまさゝい
さやりひ年の光やゝゝ
并八蘭　緑のるゝび　哥と句とゝとり
おゝのゝ高ゝやつゝ蘭めれゝゆよ
ゞゞ〳〵ゞりを
并九桔梗　緑のるゝび　哥をゝとり
或い掛ゞゝゝり
今いゝそやゞれぬゝもゝれそゝ
そのゝそゝゝい我とゝゝる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

十八梅枝　句をゑことり
弁少将御ありて梅がえいでしき
いてゐてうたひ
十九藤裏葉　句とゑことり
花のしたのこゝちどもいでゆきつゝ
二十若菜上下哥や句ゑ所ゑことり或
へは下巻とりつゞけつゝ
廿一柏木　哥や句とゑことり
柏木の葉守の神いかゝみるらん人
もすさめぬ宿の木ま
廿二横笛　哥とゑことり
よこ笛のすさびにふきあはせ
しほどもなくてうせたまひ
弁少将　絵のうへ哥や句ゑ所ゑことり

ちごの袂とぐしをきりのことり
ともてゞゝすさめ
廿三夕霧　哥をゑことり
ひざくらの袂とそみるみざりにも
ぬれぞまさるもの
廿四御法　哥をゑことり
しめつゞけはるゝ程なきものを
世にふるはむとぶ中のちぎりかな
廿五幻　哥をゑことり
ちゝそはゝ幻ぞよぶ見ても
もの思ふ雪ゝゝ
廿六雲隠
山ぎはのこのてゝそ匂いおし
匂ふの美よひかりうせ給し後
といつてきつゝきく歌ゑ所ゑことり
去といつてこゝゝ万葉神亀六年

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

左大臣、長屋王賜二死之後仍再
太皇のことかくしおはしますの
時よりのあるべきにもあらぬ
世外不可勝計一帝未の巻よ高麗
世後そひさく給へ、三三年ばかり
かの渡よ渡来之給へる由そした
まで此巻の中よ三三年渡来之
ありてそのち崩御一後変を
此巻よ初めべき巻とぞ称
のそんざいまで、初とこめてよりの
名の字数の法門と例よりれど
も此抄ごとさゆちーゆりの成会
鳥よくうくまるー給べき巻とう
八九年の変こりわるより
廿七句宮一羽とそとり或い句ぬる
廿一名書中将也　御子共六句ぬる

并二作河　桂のこーいくとも名の紙く
哥と句ら成名とをり
作河のくーちも出一物ーしるる
心のそこいまりてや
廿八橋姫　十帖　哥をとそとり
そ姫のもをとそたうをはすさ
はの都に神ぐぬまめる
廿九椎本　哥をとそとり
宮ーくんりけとおらー椎が本母る
しさ来よりにけるかれ
三十角総　哥中句ら成名とをり
作けまさにものごに都うと法ひこ
もおぐ心よりもわりん

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

廿一早蕨　　ことの初をくちずさみ
この春いかほろそんるさんの
ふしにはろく峯のさわらび
廿二宵未　　舜とんこより或一名白鳥
やうすまでそひとりの旅
ねもいろいろびしうも
廿三東屋　　舜とんこより
さしるすぐやきひき東屋の
いまりはぐろ雨ぞさられ
廿四浮舟　　舜をんこより
たらぎの小渦いもかいしを
あのうさ舟ぐも唐まれめ
廿五蜻蛉　　舜こ初とんこより
おりこんこもいこれず又
ゆくこもしずこしー蜻蛉
廿六夕霧　　初をきこより

てるひとのふこばかケ系あり
廿七菱浮橋
家島ふ云ふ冬の名い舜もも初も
ろてしぐる夜べ一ア名月こ
料簡して、ぞよ教しをうりめ、
うさこうい古舜の初よ世の中ハ
菱のわりのうさけやうをうりて菱のうさけやうをうりて
その細河海物よいうり、お遊な
きおぼくいりて留の巻の終り
こばもぞうちんゆあれ古氏よ
も、あれをもくへんこやを
うんこうさみのこいろうみ
ふのよこいれこぐり云

源氏目案巻之一

一いつきのれいはいよう　は教端の辞基深く先作者をわくつくべし　ゆえつくよくしたり　巻この始終うもその趣あり　傍人の発をおさる有べし　延喜の代門の位階の変あり　仲務集の始末も　いつきのはは　ろうけんは詞をこれを

一いと宛べし　一いかーつのく巻

一ーのうえて相壺のうえ衣の母うへをもろうへ心あり　ーのうい源あるべし

一いつくと早晩　一いさあ諫べ

一いさあ諫べ　禁制の心　一いくく　つくさ心

一いとくいよくのうへ

一いつくはほうろう泊こ又ふこ　ままよ　ままて心べし　一いつく巻つく巻

一いとかくおりよのへまうばき鳥思

一つのくさ心りやるさこ　いつくくこと

一いくくのうさ　幼稚べ　一いけくう　聊べ

一いとくき弥べ　弥べ　弥べ　雲巻

上人こい男女よ　暴虐のへとぶ

一いくもかこさ　宛べ

一いまくと　今将べ

一いせつのさいくうせ給　英之哥

一いまくうんがつくそ

伊勢集

一ふとくれあくうもきてねーぬを

巻うのもえべこそひけうる

一みてさてまつり奉将
一おさらあやーいとるこ長当大
ちあーて地その狩
一いーーそそ倚ま
一哥
いそれるさいとけるさそい僻変
いやれなさといふべー為家つ説
神ゆひそい加冠人よのふ
ゆひそい契心こそ勝の由を
源氏よれそひふーにこのや
一いさそひ物之一五音いつむいう
さふみべー一いとるこ踏覚
一池の心ひろく池底之
一いひけれふ世よそんさくみの
わまれあるくとも世よよいひひつ
るーひく
一そさこの紙るる文青い色夢
一いーもる優ゆるる也
一いまんさ来れもうーー三東
唯一心万法唯識のや
一ひそーいくふ心之言殺いひ
ろひそぐえゆるり
一ひーろひ玉よいひさ松ぐり之
ろふぐいつこーー
一ひらぐねもくんさ馬乃ご並よ女
を遠ざりて浪い宮ろ妻るさ
一いまめさる物の声管絃も受
ーりつさそいめつーーか
らび今松よめづーさそいでて
そさ
一いふや ふそ一いよの子侍子守
とみせいつ更長官も次官も職

掌(しょう)にあるのごとき。諸国(しょこく)を領(りょう)ぜし時(とき)も。
夕長官(ゆうちょうかん)の変(へん)を執行(しっこう)と被(おおせ)よかよい
して。寺(てら)をみるもさうり
一いとうこと　系図(けいず)よいわぼうのそもおも
女(おんな)をど。男(おとこ)のまよめくしたる。今(いま)の
解(げ)よすきのとのるると。天照(あまてら)れ祝(いわ)れ
このさいうり一いざさうりげう
人のねんごろ後(のち)
一いづく倍(ばい)よぞりやと言(こと)
一いむ　忌(いみ)ことふ言(こと)
一うでぶびいまのよう　宮(みや)のまり
うべー
一いうのゆげうも　伊(い)よの分(ぶん)何(なに)よあるな
ま。面白書(おもしろがき)うり
一いとうのくいまのさうり
一いむことのまうー　受戒(じゅかい)ごう也

一いさぶとうをさうり
一いさう宵(よい)やとうり。十六夜(いざよい)を。
さうひこそも。夕(ゆう)のの湯(ゆ)よやとう
て。ものあべへぐことやとうく
一いめーもいまうのもあうぐさ
と氏(うじ)姓(せい)ー一いめうりのの後
めうの氏(うじ)うこいわうり
一いさふれりふれ
一いへくく　鴿(はと)　本草(ほんぞう)云頭短(あたまみじか)頸色(くびいろ)
一いめさ　大久(おおひさ)昔(むかし)の女(おんな)を。あてぶ。そう
ぎ。ありぎうとうり
一いめう十日　去(いん)る十日(とおか)
いてけるさ　そうの一声(ひとこえ)ハ鶯(うぐいす)名
うをさうのう。あものにうづ
むハ源氏(げんじ)の我為(わがため)をうてう

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

まふるり。源。えるるるれいるるる
ねるるる　一いるるるけるえよ
心るり幸　一まいどゆーさあり
そよ心る　一いるびいやるる
一いのちるづけまい　老子に曰寿者多辱
一いるるれ聴　わるまね心也
一いまるるいるのえゆるひまり　今
案。今やるるるい。紅梅のこるる
る。あるへでこるるめもあるひ。
紅梅のもいるめるたのるる。
けれ出来るるるるまで。今梅を
やいづる。大略ゆるるるる同
こえゆるひまるる。紅のこるる
にるりれで。禁るるよ仍るりる
よるりるる　一いりを　るるる
や。せるるえる伊幷諾伊弉冊

まふるり。源。えるるるれいるるる
ねるるる　一いるるるけるえよ
心るり幸　一まいどゆーさあり
そよ心る　一いるびいやるる
一いのちるづけまい　老子に曰寿者多辱
一いるるれ聴　わるまね心也
一いまるるいるのえゆるひまり　今
案。今やるるるい。紅梅のこるる
る。あるへでこるるめもあるひ。
紅梅のもいるめるたのるる。
けれ出来るるるるまで。今梅を
やいづる。大略ゆるるるる同
こえゆるひまるる。紅のこるる
にるりれで。禁るるよ仍るりる
よるりるる　一いりを　るるる
や。せるるえる伊幷諾伊弉冊

まるるる。兄弟。妹。夫婦。やる成給し
よるりて。史。女。をいりるるいるる
一いへのよ　良家。のるる種性たるる
成べし。指家。いて。上。簡。のるる
一いるるる　有職。又右族。
一流　寛平法皇よるるべし
一冊いるるるよ　世よるの後そるるり
婦。が。るるるも同
一いるるるる通るりるも　後の世の道
の変をいるり　一冊そのうえ　いづまるそる　小
いるるるよ風とるそるひるる。るの
やどりとりるるしるるづるる
とるり　一いるれいつるか
まづくいる　一条あほう一条を
西へ切給　一いるるま　性
霊るり。又。るるる夫のるる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

一いろくわさ　早速　ときわうる心
一のんあそび　掩韻　古詩の字のとる
ぎて下句の末字の様に何ノ文字
や推して勝負をとる
一院のいろおどし　何処ともなく
栄花物語よ岩陰〳〵云ふよれ廟の
変りし松濤のおく殿天暦陵を
とひきて書るり
一のひろ又　其のやうな事をいふ
一いろくのそで
みるり
青幣　白幣　日本記　又五色幣有
一家とるれ　誰家三四月落涙夏
一いつのにごり五
行
濁る
一石山　聖武天
皇ゆき金鷲仙人建立云
一いろくのものつゝくをめし

物くらべ　狩襖　めひ物なも
くり源をもとる
一いまゝめて　うくにがさうるぞとる
一哥いくくり　張騫　漢武帝使して
槿よ索て天漢の源を究めて
孟律よいくりて午女よまて帰
とひてくるり
一哥いさゝるそ　ふ井　日本記
ものめる
え尼君をさしてのめる
一一世の源氏　源氏と初て給ふ一世
乃源氏也　源氏仕官已後
即位例　光仁　天皇　元右例云
外多異ス
一いまひろいの給さし　花つぼ
乃文のや一説秋好よ心をとる
一哥いさりをし　いさりとは海人

奥をそう支へ我为ちうちうとうさ
ひそそうやうり粉舟のごりをの
まのいそりぞよ御ごうそり
一いひさ　鮮睡
一家よりあよりてめる備衣へ
一冊いすへを礼楽をよくうつさも
一そうし南代狄のそり
一いうに一向へ
一いうごとなるれる日出光照
一高山心へ
一いりの仏のれ　極楽浄土を云
一いつもそり光をこめ給　衆人懲メ
一如登春墓註懲和へ
一いものあさたうすてこのれ末丁　未
一懲ごは、れ末丁れりびく上い白く
すてと然或い絆よ深うう

一いてづに心ろ云　古今序に修よ
一ひろ女の支　一いつりうれうる
一人や　まるを修うろへを云欲
一いひそゆをいひとむ〇仁般
一若此法の心欲阿含にて碎空
一碎破の空理よきつ方等
一して有空猜乱をを今事竟
一皆空を統て皮おの機をゆり
一そうへて有空一念のはうを
一ふへる是をいひそゆいひを
一いむれと云へ多う又般若のりざ
一らび万法一如の心欲と云
一いつよー　魑一泉のいとるにて
一尚侍よ家るくて文づへの支
一我心よいれ義へをい衣より空ら
一うへこと

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一いそ〳〵くやうじの心
一哥 いのり也 諸社の格 奥列文をか
よそへ ゆどふ 詞のそうん
一哥 槙柱 いろ〳〵 三位より 蔵の次を用
あるよかうの文をそうろう
一いやく〳〵 敬也
一右のくだ いくさめ〳〵れかけふくさ
人そうそうの心
一家つくさのそう 女この家司を
ろをそり 帝王の女 選擧人夏
一いさまれん 三位 息男 也
一いろ〳〵 いろ〳〵 いろ〳〵 見
一いろ〳〵 一哥 源氏 天皇世を
治給 さうよ 忠仕をそうして
はるをあつけ給ふをそうろうそれ
よ女三ゐと准ずる義

一哥 いのちそ いのちへ ろもこも 世のさ
乃芝りろ〳〵 ろ〳〵 芝りろ〳〵 ろ〳〵
一哥 いろれが 鶯を源氏よ ひきて 猫
を女三よひとろ 鶯いろ〳〵 猫
の 一哥 いづこ このろ〳〵 猫
猫 女三とろひもてそうろ猫を
さしてそう
一いろ〳〵 をりくやう
一哥 柏木 いのはそて そひいのをそうろうも
のろ〳〵 一哥 夕ぐり いつまてろ さし
くろ ゆりくゆりろ〳〵のと成べ
一 ゆるへいづまても不義とのと
やうろう
一哥 いつやうろ 女この小侍もて今ハ
くのさまものさ義の世をおも
そひさまひなりあ〳〵の給ひ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

しをそしりて、夕雪ふりくらしたるに、
例の若き人々、世のゆるすまじ
一哥 いそのかみ　たなさらすして
一世の道　時雨ふりしく　袖尽て　逃
来る毎に春日冬ノ夜ニ池道夜開
宮槻秋落長恨哥傳
一いづれの御時にか　女御　更衣有ケル
中ニ一者不得作　梵天王ニ者帝釈
三ニ者魔王四者轉輪聖王五者佛
一いとゆゝしきものおぼえ
所謂
一いつまでかふるさと
一いつ月をうつすと
還城楽　陵王をあやぶんとし月の
雪ふよ　撥して月を手よりさかつくとそ
一哥 ふりし　史記ニ曰魯陽以戈廻ニ
落日ヲ
一いらさりし
一哥 鳥そなく
一いろうつる菊
をそのかうをそ
一哥 いつとやも
一哥 いつそやも　ひとりぬるよの
一哥 いつづくらん
一哥 いつづくらん　墓ニ
一哥 いつづくらん　昔もそしかしつれども

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一 いげそびの今の木漆 いどころの
えり 崇神天皇 桃戦の処
一 いつくらのおん 袖ふりのをとこ
くぶやもとく 君のごう 文心りこのさを
ひとり 御ゲとの心りこるこしの
りくこ 変こしなり
一 いげこくめ 伊勢乃力女 中媒こ
めこは 孤ふとのふるり
一 いさこと 夜ざこ
一 いげくしの 白雲のこくめこふ
かくめかもとるり
一 家のもえいず 鯛穢こ
一 いこくもれ 真実の穢
あべこ 使こひとくこり
一 いこくさ 世俗

云詞こひきゆこと
一 のつくの扇 め童こ
こと 各の扇こ
一 いちの云を 指政図白処こ

ろ

一 ろくの物 禄物こ
一 ろくのこひつ 禄亭櫃
一 六条りれ 息処乃髪 云
とりた 前坊の小方こ 秋ぬの中文の
ゆ毎こ

一 六十巻こふ物こ
玄義十巻 釋籤十巻 文句十巻
疏記十巻 摩訶止観十巻 弘決
一 六位の中も 殿人 六位着
人 麹塵の袍を 着こと 青系
いふ今も 極腹乃殿人 着こと
一 六位こを 六位冠者こ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

といふ人梅のちきりをとふり
一六条院つくりかへて　河原院を模す
らうし之
一らうあり　無論之
一六条院より　蕃鳥委レ鵬云別業也。
陽成院をさしておりゐ給ひしより
後院と号し。陽成院の後院を後にうつし多
の御門領となりしを。朱雀院御門
も領し給ふ事ありしを後六条院
太政大臣雅信公の領となりしを。長保比
御堂関白買得し給ふ事あり。此地
のちに六条院よりしけりける比より
一六条院なぞ　白氏が内にも曹子を
二条院も曹子也。又六条院の内にも
曹子ありてみえたり
一六千僧の子を　大般若轉讀の属
七僧も六千僧の中にあるべし

一ありがたき　嘲哢かたかたをかしう
ありけり
は
一はかなきつれ　無常非常あはれく
こよなき心あるべきさて後ちに
一これやう　聲華　一坊なども　春宮坊
職員令　御門はなるとなりふべき宮
とまふずめてとの
一うしたなめ　そし
よろづのことも心もまぎるる心　鬼鬼
日本記
一さうでの高文　王子
三歳にて袴着の例。冷泉院天暦
四年七月廿三日。東宮の時世外例多
女人のも同
一さうなき　無雙
無墓いかにひとのさ心なすべし
一さうさうしき将寒肌とれどもよ
すさ況もあり。靨の宮之

一そうぐくきうういくおもひ
一そぐてまめ、はゝ門と更衣との妻ら我
いつり・そぐむい養育のゆゑ
一そうのをうつて枝をうけそん 五三天
願作法異鳥在地願作連理枝
長恨哥 一そいぜん 陪膳
四位殿上人のする役そうり
一そぐそうてぶれはゞゝの引聊
つ一母君のおつ一ゆゑ何い給へ
狩そのの引母君のなくてそれゆゑ
給つそうゆゑ給ふまゝとの
いふゆるべ一そうせ 博士
一そのーなりのよ 親王以下元服の
禄舞ハ清涼殿の東の庭にて
此儀ハ母ゝひて詳あり
一そうぐつそ 草花の妻をそう

一そうぶうて 不着
一そうやうのそうぜそうのつ・そ
一乃妻く 一そうけそ 勵
念 一ぐんそうぐて
盤渉調ハ冬の引のうまびわ
あひそ引るべ
一そうぐそうぐるう 傍側
飽足一依処
一そうるうあのの 一そうれいつそ
一そうく 股うけそうそのうう
一そぐとるん 常のそうんな
れとひと・ぐりあうひやう
なそうそ 鳥 下かしそ
ぐそうて・よなそうをつて・
あろやなそうをいよ車いし
一そうんとそうそ

うりあぐうを。宇都宮かなんぐうし
一そくかう 兄方く周防
一毎ごとそゆくあるくそれ松風の巻く
大井のあた兼明親王そこの名ぬい
陸奥国より進じて心うく
一舟くうつろのうつろ舟 物よ世うをとうる
とうあぐ又うくうう心いかうり
一そうちぐき 教書そよのひとうぐ
そうちそ。ゆぐうくうきはぐげ
めをいふうり 一そうてん
そうそうそうそうり。そそそうの付ぐ
うの心く 一ほひ くぐうも宮馬
山海経云 東海に有黒歯國其俗婦
人歯悉黒染 今案 日本ハ東海ノ
中の國なり。後俗よるうあ。音い
いうきかなき女い。たたうくうわと

かうれいた代のおぐぞのうう
よて。墨の娘えも。十歳よりゆう
で。歯黒めもうりうくく
一そうがく 仁和并河の行幸の
次に幸八条院為仮寄御輿之使初
造階隠云見吏アヨ記天慶六
辛也。今案南階のうよ。柱と二あ
て。上とふうぐいをそうがく
云風輩をひんがしきにうき
くたのいうそうう棄れ下れい
らんうう 一巻のうう
ぶ云るうつの才丸云巻りうという
のそうそぶのやうにうし浜うの
いうそうれうぐうう
一巻のんとぐ 花宴の詩よあとと
いよ清のうい。あしよりいうう吉之。

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

源氏の学芸のまとひ…
しいこころのり 一ノ巻
かくこもりゐ月うくぐれ…
ゆくえもなれ上いきろぐ…
一巻の寓言ことばく 春鶯囀 弄笛
一名天長 宝亀ふし云
一冊 髪そぎの調度の事
よ。海松と一ふさくらゐの事あり。
碁盤。山管。山橋。海松。青月のこと
二。墨ぬり是等をは髪のよそほ…
そゐる也ら 一冊 菱い
きてゐよりへよいあひ
もり。神の…ということのまろ
のあもりぬ…行ろ…
されぐうひもてなる
一巻 …

ろん山河よ。川帝あまで。不許
の心をの治く。…
…ろんのこころ
一八首よたてばけく 若御天皇
大化四年二月始釜ら。大極殿を
八首とふ。ぐ八首ことのり。八首
の本院なる。ぐ。朱雀門の内一町
よあり。南限冷泉院北限中御門に
東ハ東の大城。西の坊城を限ぐお車
八首の乗路よ立いびたろ
いぐ車り八結の愛
一白虹日とつれくりたるみもの
前漢書曰。昔荊軻。慕…刑儀白。
誓肯の太子丹が…
皇とろふ…燕乃太子丹が…
とろ…ろり 證本よ月つ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

めしくを二用ゐ日につゝしめ
へ白日をつゝめかごも
をくしくしくしくしくしくしく
荊軻をそれくしく今源氏を荊
軻よりもくしく冷泉院を太子丹
よくしくいつゝ詞へ

一玄賓の僧都讀經
向ふ源氏のをそるゝ後世ゝ宮
はすゝや是ゝ源氏のをそるゝ
法験一萬倍中ゝ宮
一そのゝそし雞冠頭竹葉酒
春鶯囀階庭蓋敲へ夏冊ク
一そつゝ落のゝ色のうゝきゝ是も
ワゝ立てくゝのゝそひろゝと
一そるゝのゝ紙綱を作むゝ縹
唐紙
一そくゝ法華

物ゝを忘ゝりひくゝしくゝ
ありゝ
一行成ゝそらぶき發眼
そくゝくゝ供養的よ蜂吹掃ゝ旦ゝ
ゝゝ一讀
朱雀院ゝ迎表弟ナ村上天皇ゝ弟
十四皇ゝ御母ゝ母中宮温
子ゝ服宜ゝの女ゝ兼明弟ナ親王ゝれ
ゝも更衣腹ゝ人ゝ臣列欽
一そるゝきゝ愚親ゝ賢子ゝ
ゝそくゝ況愚子ゝ
一それゝそくゝ
ゝ月の動をゝめゝそくゝ
そゝ齒固元三ゝ月ゝ夏ゝ薗
よそゝゝ則よそゝゝもよゝり蓬
固ゝよそゝゝそくゝそつゝ
本ゝ形ゝ変ゝ一ゝ変ゝ辨大根橋

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

とりくるり・は餅ハ迎えのやうなり
のやうりの餅を用也則ち團の餅
を添ゑ一そうのおくり添べき
物にあさんの物て文をうさ言うを
ふまことをうり 一それよおれて
佐よか成おうと云心
一方等経の中よ方なる経の中よ数
とるべて色〳〵に況のべう。是ハ漢
経おく。は眠前のさうりよつべ今の
さうりをもえび。死化の衣生〳〵で
七死やもうり二會の衣生有空
端乱〳〵加葉治〳〵三のよふる。
三の男へ治者。威光とふるふこと
心秋 一るるきとるべ四
皓朝ニお仕の言。羽翼已成こんり
一ねえるちりで放者こりえる。

処位寝所こうて。母屋の内をま
かちうけく中と隔のおねる
うへとひいるを云。は帳障
子のこうくうを中のこうく
一八条式アレのは方 仁明天皇のみ
本康親王と。紫の上のおよひて
うく宗鳥委 一うのうはちりに
しねうん。早下のおうんん神の。
此元のうの焼ねるれば神よい
ねうくいおうくく
一うるえ芸ひのめう袋 すさくあ乳
紙うり三月のまなひび。墨言書
引ま四うく。めさい脇切のへよ仕
一冊うれ十 うりうのが祝の
のて遣物
がゆうよすひうる痛い神の幼受の
いちうこと云心

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一 春秋の行幸　朝覲行幸とも云
一 春のよのねハ　春の調子ハ大変なれ
バかぐのりつらしらべまんと
源氏乃やとおしくなりし
一 もろきされ　般黒之
一 すみもとをとくのつく　蓮花也
一 ちらすの葉を、来世ハおなのド、蓮
臺と比翼ども、無くしも月の別りかゝる
しさしく、女三のはすよ身となし
さて法事とぶり五十會讃ん之　弄花妻
一 羽衣の　羽衣ハもとの縁よりつり畢
一 鈴虫の音よ　覚悟空と讀あって
若のうにさそうくとあまて
一 ゆふぎし、卑下の也、ゆのあまりや
すゞびまいつへきてもなれども也
つゆ也
一 竹河　そへし　書ん法く

一 浙家礼して、女がさへも殿上の衆也
ざし泉男気、家さら金法
一 樗姫　樗下の姫大納言也
一 掌りまり　瓔珞なるを
一 もろ世　太刀之守乃為り一説みそ三此
一 法の車なれバ　法の輪轉するへし
一 さりなりや　中く君の除服と讀法也
一 掌ちとりめあてと　ひとのくく
一 がな掌かへとめる変あり
一 掌のあろにス　不是花中偏愛菊此花開後更無花　元稹
一 なやまのまつり　大恵のゆうろを詠ん
ともひ絶へともと
一 母君ぶつや　法舟の母ハ卑下あろん
く、義訓の時ハ卑下なく、母君も成て
父とし也

一ひんかく　庫部のすけうつのみや
きさき秋琵琶弾四位の人々
用也。名ハ収者為弾琴諒闇よ
い琵琶とけうとやなとの事
一帝　女御　女御　更衣の名ハいかる
つまとまるくのなるへきひめそ
く実よ
一すのこ　蓮子数盃と詩よめ
つま盃乃名ハまつのめる青磁の
盃
一葉のすきことし　陵園妾云。新楽府薄
白氏文集　此等い出恩のことくなる
云。今物語のい会社会よのへり

に

一にけるへ　無似名ハ　のさきのへくなるさとくよけなし。

一ひのへ　ひのとのうし
一三のまちひし町と云
一にきは　きさき富貴なると云　鏡陰
一にこりよ　ためこり　信ふこり
一にくきとひこりけるのこと
一にくそあへひつさるのそうし
とのゆへくとのめ
一にしのこと　西対
一にのく　参二　才一と云心
一にひくき　祖母の服衣三ケ月の程
挑ふこまやうりといふのこと
と云　一にてめるけそひ
ふこの黒きのすることく
一仁王會　七箇日裁の文あるかく
ふこととのこと
一にしさ　挑りくのにしの婦の心よ云

一 びわのこと 眼者のおほけなき心のつくりごとの本を用黒川悔ゐハ本下の巻をはじめてまことをもらてんと惟ハ是もものびいろのうしろぐらくへうと一にわ島よ吟島い松浦ひげをうゑつゝ島く若ごろいかやめてうひをのゝしり栄華し源氏引別う海とゝろれく、ひとまのこともく、海とことく五巻あそびくと

日本記 卅巻 始神代至持統天皇御宇ニ

一 西山のうへに仁和寺とゝ光者天皇のはかをとゝて仁和年中よりはじめられうよう仁和ともをとり又義年ハ門ハ天暦六年三月はじめ家あそて四月よ仁和ちよ遷れおり氏物語の巻雀院い巻

平ハ門准してこれ是とゝ合書心

一 にしのくさ十方 従是西方過十万億佛土有世界名為極楽阿弥陀経

一 にわひもうくろうくのこぬ玉きあよろひのしてゝ立ともうくれとハろくの下墨のいろくえびぬの紬く麦よくの下墨のそでく

一 にひうくぬ為よくて はゝさの声とれ息処のく結ようとてのあうぬ物男と第をさしてのあゆ

一 におさ純そうろうゆ

一 にうくさこれうくやいかくべき指仙客容顔似勇潘安仁之外舅気調和兄崔季珪之小妹気俗のいさばしハ兄のごとく云詞のそうくろうゆ

の妻をそうろ女一ようよ似のくろゆ

の.そなていつゝせ給とこゝろへ
再一ゐんのおい女二のみやのおこれうしうと
うとゝものひかくしきせなりてこれ
ーのていかゝ紙似のくるしきものべー
ほ
一ほいい本きと　一ほくあと　より給て
いと
一ほうげ央彩と　一ほーらへの山是
ようとゝ和らもものさ女よゝあとゝて志
一ほうけづさ　仏法めさと
一ほくゆゞめく　とくまものとゝめうう
方曲と　一ほころゝ心ー
一ほのゝも　ほのうに娶うーまと
彩指よゝとり.今少將が妻のれと
それとゝひこゝも
一ほのめす　まい教よゝは.我心がま

ほへとひこゝろ〳〵ゝ
二うゝ仏のれもうべいくゝさみ
冥入於冥永不聞仏名　法花経
一仏いとのうゝとて　上の句よほゝみの
れもうゝさゝ.ゝのいうふけうへほみ
のもう給りんとの
一ほ給三味とこゝのよゝうのとんほうの
ーもこゝおろーてうゝて.止観よゝ指
三味あり.いとゆう常行常座常行
半座.非行非座四種と.ほ亮懺法と.
まゞ半座の三味と懺法と.天台師或
記る寺式うゝのひて志時よゝ根の
罪と懺悔すほゝと.ゝ条ゝ有房ゝ
云懺法の要よゝ月のあうーぶー
ゞのうゝひゞーとゝよ口唱のかうと
とひゝゝとゝくゝさゝり.昔いうくゝ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

ぞよきうへ仏うけたまはりてよりこのかた日々
ごとにまうで侍るさうそうにて云々
一ほんぞんのもと本のもく
一ほそろくとり保曾呂倶世利采
のかう
一ほとけ仏殿 廊
一ほうしん法界三昧普賢
大士 南無法界三昧普賢令相云々
大士と同じ。法界衆生普賢と同たい云々
一ほとけ
一ほしけんぞくしゅ
ほとけのたまはく
一ほしけんぞくしゅ
れさうぞく仁徳天
皇のれいは。ぬぎかへられけり。何
一ほんさんのさうぞく弄 世を改は宴
と給こをへ給
一けしきハひまうと寛等供奉のか
数又行宴のそも
の奴のかうのひと
一ほうの星のまさかりぬるや光けしの
あかびるく面白く新かうさうの
一ほうきをしひきうえそうかの
ぐうりのもやをつ む宴あり。此四方
よいうちさ肩あでこ。品のござ
とのるひさはすりろくろく
一郭公のど 五月安西外語二十二
東ノ後雨中ノ声一仏のうりさ心
まて九州の末の世のあさこい元聖一女
善悪不二の理を説く衆生のよ
ひを速よ覚さんと云々 木
悪心ろろこ心あよも実報
荘王こて芸厳経祝給取いろも
話梅ろろこやろくみとうと
さりく。前まよこをのり仏と

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

報身のをぐことて、佛の數よて、量又ふ〻ふ〻き形そて法の、三界唯
一心のはるれだ、仏の心もふ〻ふ〻き
一ぼだ〻〻がん、仏の如法あそれ
くれた則菩提則煩惱、純一妄
相よて、文よ別のはるし
一のうさほそびつ〻くも共消滅
一ほどく変驚こ変
一ちうくるほんよすべさ玉を女の本こ言給こ
一まきぐうらほみよりうれふうゆ
一ちまうにほふうふに朗のふ〻ふ〻共心
一ほそうぐまも女のふうかりざめ
こふ〻こその如こ若后を更女れ、あや
あ〻ふ〻ふも若用こ組そ細とをこ
一仏のふ〻で仏の眼よ滅文ふ〻法
へぐも、常住物不滅こ説給こ不滅を

もうぐ〻弟子を連数〻ふ〻こ尼そ
のの心をこ
一ぼんーうふ　梵字
一仏のおぐちふ〻ぬい共は幔墓そ
うへよ仏こおぐ〻経の机をうれ奉
れべ
一仏のおうまうる処
観經云阿弥陀仏去此不遠極楽荘
厳おりしゆ〻ふ〻ゆ
一仏よもちりのへ慈の我ぐそのふ
ふうり
一丹ほよぐぬ中君
のうよもどふ〻下よおるとしのは
ふ〻ふ〻くの号こ志のどふ〻さいはり
出ぬおるのもこ思ふどふ〻ふ〻去一年り
一ほふりぐ〻ふ〻その為こ
一ほふ〻仏経日實語者不二詐語一者云
う

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

貞信公の建立しまゝ
一仏のまへに仏乃ましませんこそのり
一ほろけ ほろめさしうる心ふかきの事
をすくのくつくつくつくつくつくつ
一ほつえ まゐる
一ほくへ又台こうくとまべ
へ
一たゝうう 別納 前よりうつる屋 酔
引人の任 一へんくえ 変化
一へらく 卒定文 いざかめく言 卒
伸 字法右衛門物語言 卒伸が女のと
くへゆえそ おくまわをして双の妻
とをこよりちく月をめしけま
と ゆめして 墨をもり入うりりを
うつて まめしくれい女房をえ
をてしゑろ

一般のことにて候ことも人
すうくうのけしきも
人ととつすいそにやすく候
んとの夏さ
一へんつさ えゆのんとつえて
一へいーのどこ勢 般の 考くる
一へんけのあとおびーあて 河海
生の中の死生ことつさうと記され
うまで 人界の劫初のはて死生の
どいありとてしまて 変化や
言い仏道の証の形力或いは力より
あの吉ゆの業と感して うりにそ
形をおとる事あり変易生死
とのそこを 布袋和尚 示勤の
変化をと山拾得 文珠菩提

云ごとし 栄島上下略之

一へいさう 左衛八幡社参の時 供奉十二人をめし毎度 是ハ従前例東照宮をたくそれと陰陽よの立 弄出処この陰陽辺歩行のくらゐ

一 ことなる法 眼くらみつゝてよく成べし なをくめくまわる心

一 このね 常の垂

一 ここにえたるものゝすものゝ

一 うぐひすのこゑ

一 こゝろさし 雨をこゝろ

一 こまりよさと 本妻よりもと

一 こゝろうきの心

一 うりやさん 売出しけんの心

一 ごてうり 芸く友ごてう 女ごてう 養の意 万風芸ごとし

一 ごてう悦を 俵馬京哥詞ごとし

一 とうものそ 学勤

一 こゝで法 取出

一 こゝろもち法 そのつい書戸のかゝり

一 こゝ毎つゝく

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

まへ玉ぐしぐらぐらうべ
一そばぐうり　れ鬼面の如くつまの
うりを　さ油くいひるひ
又ひさうへ　ととづ玉ぐんいな
なしさとうり　一ぐうりまのさうさ
とうりてとうりぐいぐうぐう
まこひいわぐ　ゆさうりすう
一ここうのこ　讀經聲　倍増うり
引声のわうこ　修放
一ここに　一ぐうりてうりてひ
うりてうい　優曇花のごうこへ　八
万歳の時節　金輪王　遇四劫其時
海水半減すよりうぐ　栄出
いうこ
一ここさうまう
猫鈷
史婦の中ないつぐさうものぐ

うりめけるぐのいふことばの心
一ここ油うも　ここうう多い源油養こ
心ぐうこうこいは玉ぐのもうけるる
玉ぐひぐを　ぐのうーのうり
一ここのうの方病　而油涙とも来油
院ともつべ一ここうこの屋　花盛
栄殿ハ　弘徽殿のやうあり　梅壺ハ
又盛花のこーにて　竹ともも
これらさ盛会ぐむりれうこへ
姫ぐーぬうもも西ぐ　摩よむりれ
いうり　一このやうふうを
ぐハづくうり　花鳥和歌する如油
よぐうのをーつく　あの浮われの花よ
くこうぐれぐいうぬへーとう
一ここひとつこ　花盛　中山　羽根　打云
宿ヤ　ここの時　いた陣　毎訓　夜打

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

丑寅の方に、右近の陣、勤めて、丑刻物の節、人々寄り候由、云ふ。暑さ、虎狼、
一云ふ、なちどり　我ゆとともへいの島
もとつまくいものやくまのうら、
降る雪の数のくまもるものかな
んとぞ　一云ふ、ふくひ　ふくんと
一こぶをに　あはれまさごまさき
一云ふ、げいさげ　さ波風よ　弄　十二
三歳の時、遣唐使、云ふ、波斯國
より到る。琴の声、善く行のもと。阿
修羅琴と名づけたり。この一巻、
まことの物語、云ふげ、かくこと
のさがなくへいさるに、あく
風よあひく、波斯より行く　梅
檀、まうもよ。琴をひきく、おそぶ如

まもりて、琴をおひ、弾くくり、おと
ふ世云ふをうごく、月夜よくりて
ゑをあけくみる。
一冬のうちの節会　年中の節会
一云ふ、ぎんぐ　まで　この楽いつのよそく教
一云ふ、ぎんぐ　こ後る。　一云ふ、ぎんぐ　ありて　ある
ゐて　満雲　深階の　夏三月まで。
一春くのたくまく　大殿大后門大后前位
饗の宴飲　一云ふ、ゆのまはさ
笙取由。ゆのまこだの行まて経を
ゐん事ありべし
一云ふ、ぎんぐ　年忌。一説よこうこは十よ
こうをきゝゐ年満く
一云ふ、ぎんぐ　年月原てりめまで。あざう
タくのひ河東楓寒よ風むづる
をかん為よ。そタ月の夏をとり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一冊そこく 冊の心 面いおうつのタ
とおくそでさいくいさくわんじ
つるよ 按監よそれるが神のつじし
ところうさ監うそうん取をも馬くくあ
ばこば ホおりひけうゆくよや 詞もも
ひり弄こをあくの音を 口づ面高
そいうーや監くいうあり むとおぐも
あ取とあのやうにゆひきうするく
一冊そうね 按遺集よ必の繁あり
打音松よ 一 多のぐ常ゆうに
島い一越河ま 島のあよ感ーて 芸
う鳴鶯こ池の水るも蛸るうこ
一こわりでるさへ芸とわりい迎落を立
一こうりてこて おなりてい奥こ者よ
りうる西こ こりい外こと西よな
ーわれ上 こーゆりみく
こうあけうあり
一 野宮の宣旨なる内侍のすげ女の元
こ宣旨こ 内侍こ 参元そうつうり
仏場よまつうくまうべー
一年この墨秋の沖ホよ 内入道
の邸よ毎夕をー沖ホ面ホ又ホ
よ取をくくへやうこあり
一こうりすることも 整たけうこと
の夏こ 一時ぬ雪霜を
ようを 河海 うつ月の一こーげ琴を
仏海つよおとぐのくへのうそぐ
とて 芸のどくよもう 今一つまうよ
六月中十月の日とに雪みとまの
どくこうくみる 山門おけさにおど
みまての後 けよらの三べ 先つ
しまてるりうり見いるつくこと

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

親王をはじめ、ちりのえんあり
一 ちりのえんも みちひろき海のさいはひの心ちするをれをうまれとりわき上やうくおもひあがれり
一 ちりのえんのあや 延喜式云、凡客内親王、従中納言已下宮人、丁人、史丁人、六位已下宮人、丁人、両宮、太皇着陣宮、已下丁人、各丁人、参議二人、四位四人、已上、勅使中納言参議各一丁人、四位六人、長奉送使中納言、若参議弁史、中務丞、各丁人、已上、養向下外記云々、仰云々、奏、群行の月、いれ前七勅使云々、河尻まで借奉して帰参す、長奉送使、仰事すでに云々、ひもとり、正四のは、馬場殿よりそへうつくしけの下着の由を奏へ、ひもとりて、ほどきされてゐるを、職事して仰せ事へ河指遣集の寄の何をとりて

一 ちりのえんのもり 七十老、改任験其処仕うる車、老経任 執政尻致任例暑之後也、ふいに七十よりうへも仕すまつるにこりてひつをもちてうる車をも先祖の廟よりこれをうへ変あり改、懸車の歯之ことをいふなり官を辞せしをもれ改よりつくべきなり一河海よりこれを変ぜつくすまつるなり

一 ちりのえんのもり 千枝常則 高名録共云々、長恨哥 王昭君 和ぞ妃八馬嵬にうしなはれ王昭君 夷狄の夷秋ぞうしなはれ王昭君 仍云々

ちゝさうこと弄たのもしくとり渡
まり、琵琶、琴うちまいらせ琵琶ひきたる
おとゝよき
一中ねのころふのほうそのつゞひ、五月雨を荒手書き
日とまり書き、菊、手活けなどの
まに、清らかに五日にあまりタ
雨、中将なども参り給へり。とのこもり
居れりくまゝんひる雨ふり暮れ弄手つ
づひ、馬ゆきの時、二人ばかりひきて射
る事教
一ちゝしんよりぬべきいつくしきもつあゆみ二位の中
将
一ちうすさくあり
遊あそぶ
一ちゝしき地鋪ハ、
唐遊ふ衣うるく籐べりつけるゆ
一ちゝす快げ養書物の帙く
一ちゝのやつきあ後の廊のもとぐ

考こと成ひつくしまつるべし
一ちゝいとあつきを氷水にひやしてあ
なうつまゐる
一持仏 お仏堂にいまさくらし
さまでも、先仏供養の事さ
一ちゝのひのい 調ちゝんの御
一ちゝしぞめ 丁子染香の墨染
一ちゝさまり 迎法花経
一ちゝのやつきあ丁ちゝのほりあ
かうさ
一ちゝほい玉ゝ
ゝ弄ちりほいまゐちりはばゝ
ゐる
り
一りむゞれりそのそ仏ゝ
あまりてうあの事をひうを除時
やいふ
一りむゝの参ん

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

卿系(りく)　前斎院の御時の祭、十一月に侍
りける也。第一日は中の酉の日也、是を小祭(ニヰナヘマツリ)や
う也。御神事は午(はつ)の日也。内裏にておこなふ
一　りちのしらべは　律(りつ)は秋をしらぶる也。
女もおもしろきを語りしはかなくてしらする、十
月なれども、冬は秋に属(ソク)す
一　柳葉苑(やなぎのその)　上十日はあり…なり。今は
絶たり　一　りんじきやく
客(りん)とかきてりんじきやくとよむべし。大臣家の大饗
なりし摂政(セツシヤウ)の職となれる人はかなれ
ばなし、又くりかへしてありや。正月二三
日のうちに客人の大臣に饗あるをいふ。
打(ヲ)鷁(ゲキ)首つきなどの羽也
一　龍頭鷁首(リヤウトウゲキシユ)　竜(ジヤウ)は水を心にかなふ也、鷁(ゲキ)
は風を心にかなふ也。故(カルカユヘニ)に此形を作る
一　りんじ　ちよくつぎの折にしあるつかひを

く、呂(リヨ)は春、律(リツ)は秋也。日本には呂律、唐
律呂と云。本には律呂と云、律は陽(ヤウ)、正(シヤウ)之呂は
陰(イン)、助(ジヨ)之。然ども源氏の中には呂律と以
く律と源氏にはしらべをあらはせ
し。源氏物語に調曲をも源氏のしらべ
のうちの心をもって、呂律と律をしらべ
しるしをさだめたるは呂律と中なり。
本朝伶倫(レイリン)のおほくは呂律と申
を用ゐる也。一　りんの手(テ)　手
またしきの手なりを云ふんの手
かの事

ぬ

一　ぬさ(ぬさ)とて　ぬさすべてしあるぞ。
一　ぬのはく
一　ぬさ　繊麻(サ)　銀首(ケイシユ)　額突(カウトウ)　拝礼(ライハイ)
ふかせてなど　幣(ぬさ)を奉(まつ)りて道祖神(ダウソジン)にまれ
　一　ぬさをゆかれるに

源乃つま とつまこめいこみて
いりつてさ ゐへ行給へ
めりくしあり 涙のそでをぬ
ゑと云 一めもと人賊食愛
とくかのほこつの心よりつ
一めさうしする 捧物の衣うきた
乳母へ 一冊めもめへそ玉
いふまてつのさゆるおなれた
めきやめめむ乃なれいふこ
る
むろこ乃重名
一るい 親劇へ 一そそん 三ふちす
流轉三界中恩愛不能斷弃恩
入無為
一かうこいひをとさんやするふ

隠
一なにのこりもと
くゝも 夜者專夜晝同輩長限
やそそみくせい文衣のそのま
ゆの給へ 一をそそうれば
けくいめる心へ河揆
一れにめ屋 納屋 在後涼屋二泊ふよ
てまゐるおをなをゐるに
一をよをとりそおいひる 助友成人ゑ
心へ 一なゐゐてまる
一なくぶとの云
鳥追ゐをとゑ 愛名
一おりてきよ 面月らくさく
一をくこうかくくこさ 押立方
日本記 給よ乳けまるのそいふふへ
一おりの れ脇とやく 脇
れと 祖母へ あるけ物語よりぐ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

あそ〳〵おのくのうち
一おりやけ(ふやけ)ふ一おりそゝるとて
いるをおりしめるなどいふもあり
ほす〳〵ほしてもいふもあり
ところ〴〵もりてゆつて
一おりゐ(い)ゐ(い)あひの事のこと。清
涼殿(せいりやうでん)の東(ひがし)の庇(ひさし)
なり
一大盃(おほさかづき)にくみ
給(たま)ふに
一はぜ(ぜん)うてまひ
うたふ
元服(げんぶく)の折(せつ)の赤(あか)き袍(ほう)の腰(こし)
ぬき。えぼし(烏帽子)ゆがい(ゆがけ)ものめして。舞
なる袍(ほう)をきうたふ。又(また)淺黄(あさぎ)も
いふ
一おりゐ(い)さぐ〳〵た大(おほ)きの酒(さけ)
一おりゐ(い)ひたる(ひだる)の食(しよく)
事(じ)をされ(す)ほのめ
一

源氏物語

一おりゐ(い)さぐ〳〵た大(おほ)きの酒(さけ)
一おりゐ(い)ひたる(ひだる)の食(しよく)
事(じ)をされ(す)ほのめ
一
おりのぐ〳〵わんごろの事(こと)
一おりゐ(い)さぐ〳〵た大(おほ)きの酒(さけ)
きいろ〳〵の盃(さかづき)酒(さけ)い。肴(さかな)土(つち)器(き)のやう
い。又(また)菓子(くわし)めして。これ盃(さかづき)を給(たま)ふ
ちらさ 御(ご)さいさめのるこ。是(これ)よ大
いあく。男(おとこ)の束帯(そくたい)垂衣(すいえ)なども大
袖(おほそで)うちめるこ。大袖(おほそで)い男(おとこ)。小袖(こそで)い女(おんな)の
きうこ
一おりひつりあこ
わ(わり)櫃(びつ)おをまのくうる学(がく)わのるこ
ふとのい。作(つく)りそこうる学(がく)わのるこ
西宮記(さいきうき)木物(もの)枝物(えだもの)花菓子(はなくわし)物(もの)
くうこ。落花(らくくわ)をしうこ。立菓(たちくわ)をい
ま枝(えだ)。まいわよりるこ。大臣(おとゞ)節会(せちゑ)後
よい膳(ぜん)ふ給(たま)ふて酒(さけ)をうる。元服(げんぶく)の時
のくうにちびくわるねこ
一
おりゐ(い)ふ(ふ)ふ(ふ)
おりのぐ〳〵わんごろの事(こと)
一

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一おもしろき ものがたり
一おもふく 御と云心ハ頭又ハ主と
云心也 花優長なる姿也 面白き
ものもさそはるべし
一花ほとをぶく 油火也
一をのゝもく 河各鬮 八雲おこせ
あく心也 一花やそう 大趣
大くわの心 おうこれいきのもと
なんにく御ぢきい女のこゝろいき也
体のもの 非つく御ぢきいおりく
みいり 一花ひさしうわる
云のこゝろ 親の家よりおこせ
苗 楊家有女初長成 養在深閨人
未識 長恨哥 一花ほれ大やう
よ 乃ざうなるく 河穏
一女ほうくそうく御ほし 無沙汰

御ぎを女よりなりくもの人家又我女よ
りくくそうくし一おりく十の程七八
ものの心 一花ほうく おほとき
日心 一花ほやけくく
あり 主人よ 恨みでおりるく
一をくこう御し 鳴呼 おりくこゝろ
一おごろくくおそろしき心 驚之
心をいふり 一花いふり おるく
しさゆく御くしんやを云ひとおり
一おりてふを 面月をしなふ体云
俗よほくくごしくこゝろ
一おそますく 形遠 文匿 とゆし
風 うくおそろしさゆく
一ををひりふを 小杤をひりく
一おおいかるく ふをごく
一花いほくしん おりますの心

一をそうく　おめやかなるゆくゑ
うるる　一れこめきて　鬼
のうごくゆくおりうちうちつきと云
一れまて　れ産ろ
一れほうい　信よろこびけるうち
ゆうくんなることおほやうくこと云
うり　一れほれおめく
と回ゆく　一をそくさそそて
れをおさへうく
一をこにそ　うけけあるく
一れほちのはま　路　ち病
一をのれゆうろうものもひけある
夕鳥いくんさその像まて　ろか
ものひけあるといり
一をうちろへ　遠近
一をこうり　病のくなうと　病かと

あうこうくそよりうくうの信
終とをこあるこ云
一れこれこひたる　辭これと云況りる
ろうろる壱あり
一れほをよ　作ひひけよの心
一れほけなく　天心我よ似合めるを
おりけあるこいり
一をこるひへ　行人
一れくまりあう　おくふうさ心　万葉
よおくゆへとうり又奥　日本記
一れひあん　ワうその誓　前
あよくへあり　こんそうなる
かこい　すこうのそをもゆへ　ゆと
るりこそいなりあるゆもや
一れをうこまにり　作　家のよう
保ちもあるうやうに毎よそれ

のふ度をの給ふ
一をこなひのらう　行労く
一おとゞ　一おとゞもなをわ
かごゝろし　ふるめ寒よはくびそか
くり　ふくへしくおりくもやふ心ゝ
一おとゝふくゝに　別よ思ふのあるこ
なり　一大ひらつくゝ尺八
の笛　河大笛篳篥　尺二　笙仙客　七サ
二尺八寸　呂四寸八分　律書圖云大笛
篳小笛一倍　又曰尺八為短笛
玄宗皇帝前身　羅漢也　好吹尺
八被擯出云〳〵
一れふいひくくは茎　秘色　今の蒙
頭く　秘色い磁黙　越州ゝりくまて
もる　おく　そゝを翠青にてはよ
勝ーり　仍そゝを秘蔵して　ゐそ
不用く　故ニ号ス秘ふゝくゝつゝの物
汚ふひそくのつゝい　今業ひそくゝを
き業頭の影く　一おをうゞく　せゝ
ゝのゝゝく　一おとこゞゝく　正
月十ゝ月の日よ　家中の指ての月う
ゝ　一おひものをとゝ　上の汚よゝくゝゝ
らんやいゞゝよゝまのをりをゝ　一
おりくよゝいゝとゝおとゝにゝ
ゝゝゝゝゝ心をう
一はゞくゝかゝい三月　尼去九月ゝ
辛去　毎月三ケ月の照なろはり

て。十一月毎日に涼服を給ふ也
一ねびしらぬ事　桐帝は源氏
のはゝよりは若く給ふなり
一なほしは中将のなりけり。ワがはあをと
しよりはきぬもし　花鳥　聴直衣ニ
人。びりしは直衣のことゝ常に用
あらく今の世も主上のは常にはけり
なれしのこれとりらぬのふ衣の重ね
衣は二藍。或花田とまよりて着る。
源氏は宰相中将なりし二あるのるなり。
次中将はまいまさりぬれど官いさ
よりて。これ二藍の直衣と着用
すべし。官のしるさは宿徳の名を
わらる。官のひきいはきことを用
あなるいく。裏葉の巻よ。夕霧
宰相中将のなるとしのるす。源氏差

君の後ふして。非参議の限ど各子々を
かすさハりへしも二藍はよけまいよの
のへり。非参議とは二位三位なる
中ねとのふとてよ夕霧は六位より昇
進し給ふなれば花田のなをし
ときのすべきしるし也。梅木の巻よ源
氏乃夢とそこの二藍なるあひのはぞ
よ由りれてもしわりいま頭中将は
これ二藍なれば。ワれ直衣よりは
色こしふをそるる也。近代直衣の藍の
下襲のくるそより也。禁色の人ゑ種
殺　面白堂裏　濃ヲ後　夏二藍　穀　おほかしも
直衣とさら佳との人は冬絲しの
いろを用へきる事る也。直衣さら
人の下ぐさをそめくらは男着
とぞえてゆる　一　おほやけとおぼ

くそしてくれりて、歌中の贈
答ありより、宣下の事ともの給
とて　一をかしくぞ侍ん
りの御のはおちあくあねよとんと
一花のうん　ぐらに　脳病の心と
一けんとて　源氏のとくいうん
歌よりて、けのものへうと
一事大うに　花のとがさい源く心とをく
ハ心とりくろ　一花同ふしぐさ
当の袍よ物要と着して、裾をりい
よの喜く、垂衣よ裾をうろいさのか
ぐさ出ともいつべし。おぐれある
いまれあるつもの。そのかあくろ
しおほみ王のみたんのとぶ
ぐ云心なり。又垂衣すぐことする
ろおほぐみすぐさやいの説あり

一ふとしなく　源内侍を、源氏のおぢ
なくゆゑとぞ　ぼりくろ立
一たくしく男くさ
一花やくしくぐり活れいも花想
は女、親王内親王、天延三年よ女文よ
当くて下の一位、は母徽子女王、重明親王女
くしくぐり位へり。いまの物語よ
古条は日記と、徽子女王よりなびく
てやられれ、母よりよ母よおい
くしくて下の例なくにちあ
くくつなべ
一事なとめの、主通女ゐ万ヲトメ女日記
し女　一花ありにあ
も　徹　一花さめくろ八雲
おけめい下女、こうくひとゆしく
家よ抱と納う下女、不浄のとを

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

生ぬの縑二悩とめしれてあの綿と
給今そは九とひらーうけおおく
女しとゆーて去。濯く
一れほし爰 致主歸家の母大和路と
つて松津よ発て雑はまそそくめ
つくく七日よ六この儲所よ仆給十
日よ京し給く被六位尓欽定敗
永れ旅舘く 畔は代一女秋文のまれ
よろなれば芸くめくいつくよや
一思賜のは衣いよこて去年今骨
侍清涼 秋憶詩篇独酌膳恩腸
御衣今在哉、捧将毎日拝餘香一
聖廟の作
一れそれ分もる
あび 門の源よれそ給つ夏栄
うえくざう支なれと給り給し
やそそくあり 一れはい爰 大警

新撰未記 巨燈屋 旧記よ多大燈屋玄重
一れめひづくひのひて朱雀院のれ月と
つくし給支い三条院なれめひづひ
給るよそひよをめつへ
一れ浦ぞくの皇の光と七夕桑よ洗
のおを毛上りをそそくかーの光を
うはーてそくるくるり
一をのうくにつけある身こや
一れれるの をろうするりれく
一をのくえさへ 吾王質名室山見数
童子の田基春子質貝一物一如事校倉之
不飢局味終、弁柄楠尽既帰無復
時人 一木ほそあそび
大はは通く 一木ひそめし
れ見の巻よあされれさくうを
包ゆ代くみのくり

一おほきおとゞ　おほいまうちぎみ
とくやすく　一れんじゃうぬそうして
なま車えいまゐり後三位は位そ
ゐて一ふの人ぐ　内大臣なりて一位よ
ぬのぐ　後一位也聴二牛車一　覚弘八
八月　左大臣薨　源朝臣宗　牛車入時
賢門上東門ゐる
一おびそうけなどそれのぼりとの
ねりぐさわをれどもうちゆ
一ぐそひれあり　おほれびれうく一経
大やうなる心ゑ
一おなじけらびよそして　各留半
座二条二葬堂二待我殿は同行人
法眼祝師立會験　一をとゝ
ゐて昇進よ人の遊なりぐさ
一れうびおどろびぐさいまゐ
ゐ心ゑ　一おやぐさ　一おれうす
なぐさ夏衣　一おくたぐさ　脱
萩ぐ不堂なりぐいれうり
一れうりつゆぬりり給　ちやくとるり
源氏の法へうつゆおほふり
一おとゝのぶぐし　若経日満而不論
一おれやびぐさまゐうり　左大の

忘れ　一おやぐさ
ぐ　元ぐ二宮卑下ぐる心ぐ
ぐいゐ地下のぐをまやをゐり右
饗なぐぐも人数のおれ文と思
うぐんぐんあちぐいうり
一おぐぐ　右近左尉　内大臣轉二右近尉
例忠義云々　外　例多　従物委
一おひすぐし　ぐおりくの心ぐおいぐ
ぐあう心　一おれぐす　ぐぐ
なぐさ夏衣　一おくたぐさ　脱
萩ぐ不堂なりぐいれうり
一れうりつゆぬりり給　ちやくとるり
源氏の法へうつゆおほふり
一おとゝのぶぐし　若経日満而不論
一おれやびぐさまゐうり　左大の

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

騎射ハむまゆみ。中するハ不射之。古
条院にてハ羽射する馬にのりて
的を射なり　一をとこ君むなしかりしを
なくさめん　源の後見たまへける
も内大臣の御心をおもひめぐ
らしてなくかゝりけれと　罪遁之
一たゝしうとのかへりことを　大宗二巻　若
得為人聾盲瘖瘂誹謗斯経故
獲罪如是　法花
一おやおやのけうかう　論語曰。子游問孝
子曰。今之孝者是謂能養。至於犬
馬皆能有養。不敬何以別乎
一をこりあひ給て　風病発之
一大はらのゝ行幸　延長六年十二月五
月。大原野行幸を模してけり
案るに委見之　一をれしくおきて

かれくさきく。それてまかる同心
一おほやけにめしてけるを　又はうま
いかよりそうらせすらしそなきこ意
参内給のりとの職ならはめし　お
まうけかるくしきさのや。さまれとも人
ゆるしとるゝでかくあり
一たらんかり色　落栗色也　ここ紅
襟さえ。但数とのいの後あり。紅色
のなかうりつ思くあめつ
一ゆかりもけはよい　三月なれは八月廿日
は。ふへきれ　花の誤也　おなしの
蘭ハ。家の心よらせあり。又も野を
ちよの縁を　一女ハこうよこそさか
よ　婦人有三従之義。無専用之道。
故未嫁従父。既嫁従夫。夫死従子。故父
子ノ天也。夫ハ妻ノ天也。源の養子なれも

又実文あるこゝろ男ふみ

一おとこなどつかひて　嫗　老女のもと

一哥　かりくらしてはゝ　寝　夜のとゝ

てあり　つまり川　あの川よみ

ど人の涙とゝこゝろ　人の書にも

といふもおなじこゝろ

一哥　おもくびよ　中通い玉への通路

一哥　おもくびよ　鳥い巣よ二なりつゝも

のとなり　玉を鴨　かもよ　仰　かご

一丸三　ふたゝへより

一おびしごゝろ　思前

一おものてゝくる　筆　筆い書

なりおもなくいゝくるゝ　ざ　曲

ど　とゝろ　ゆきたくなれ法

心乱

一おとこ　切灯　きりとうだい

く　とそうかさあり

一女のこゝろなんか　こゝろ人　見覚

平　隠　誠よ　左右　時平　先　れ　多

有　失　とあり

一着　おれゆきもちさこと

所　前　左　没　左　なれいおもさあい

ゆきもちさこゝろあいさ

みとあり　女　沢　も　日　こゝ

と

一けぶの　くる十二

ゝそく　夜　のはゝそ　例　引

つり　路

一をさ　あのつくる

ふる川　河　置物　机　唐　羅　未　濃　覆

一着　れ　後よつ　て　後て十八年　十八　吹

立　位い　清　和　天皇の例　花鳥　秀　花

委

一女いまとあるれよ

とふるさ人の　女　感　陽　気　春　勇

男　感　陰　気　秋　思　妾　毛詩

一おとこのこゝろをもつめ　国よすぐし

うはやのそーげまく

一をそてひろさうけいはあ人のこをう
ついはよくあくくの給へり

一所おきてゆくすもろーもめ花けまく
てよとくいさうる所くいつくのまやよ
心をやりてこころくきくる〜私云は帝の
給ふひろ後崇光院御本如此

一女のあいこれおのこつこころき我も
人をおのこつこのれいあそこく
女人為業障温盤経畳

一榎おやのけーもやつまのへり親
の者のいをろりりーゆくくいつこまの
つくあ者をはくーはつり

一そくりゆよ笛をそて笛の外給ふ地
おろべー

一おやけのちこさ
ゆりり近清方將く

一所タまり大くさい一ふひまてわひのひーるん
ふこくしていまこも。さは主上よいを
じを

一おこれのはがし
作給の着くく娘のこ母の給へり

一たいかめ、こうさ菓そーせのへり
入今て余酒盤如薪盡火滅方應柔

一大くさい法そくべきい橘こ罪七
とうわり

一所大そくい屏を
まろーにそくく術士のべ堂のり
来ろそくく

一小忌そて着櫛十

一月中の卯日新嘗會辰日豊明
節會ありこまをる。そくく
ろあと云いこ
れ佛名兼和五年十二月十九日始
之くく今へ吉日撰り
一三日はつれ源のれてふこへべ又和の

変化のものを導つり給ふよふへき
はもあらじ。こころあるべき人をなすしを
あり畢竟夢幻泡影の理也
一 おりてこそ　葉をちらくこそべかり海さんと
との心かや　一 ひらちあかれく
あちらそかれくある心
一 おほさとと　王氏の中に絶く人目ある
つきみかりし。継母とおりくあつまりやしとく
一 おもひ給　わ御それ同心すや。弁か
ござましせびし　新花
一 おくちの　松葉の露ハ消て見えある
なりハまい消くゆ　と消なりき心
あべし　松葉の詞跡也
一 おもひてあげよ　服衣の色のづきもよ
萱草なとの黄衣之称とあるを
ひかるとひこしこも門おしとも　云花

常みることや　一 おそろしき神ぞ
女の嫁すべきみかともくぐるハ鬼魅か
しの料どて。古文を好そう
一 おいどし之後　同枝ハ姉君兄弟なり。
いさそく　ゆるの心ハ大君へ深くある地
と大君へいげまる心ばしのひくもなきと
のゆく
一 なまみあべし　大
娘ハ兆名にして ひくさ娘の也
一 きみつきうき給て　ちとおもしをまづび
としくうきのべし
一 おのかそこ立　誰もそ生れのひとこと
と古女いやけく白衣へハ孫あるべし。
為ハこもてゆけど。どのが世よひるが
中君ハさもあるめくけり
一 ほれくしきとき　琵琶ハ琴八絃の曲
名也　一 なしやの様

進食日本記 神功皇后紀北到火前
国松浦縣而進食於玉島里小河之
側一但止依世俗之事忌矣
一たいや 紅紅しあり心
一第 花ざくら かそろーさく
一おひまーそそゆて 見えくる
みそろーこと心え
一おほさき おろこころのとにくし
さこのやえ 一おとーげのると
ろ道のありさなり
一ふくるる てづ 其この折をうつくしく
それも見ゆるよりは上臈のれさ
みでなきあらずある
一れそろべき お中にて生長ある
おそろーくもとなげんや思ふる

一をひさげ 遮走
一をこやそひほん 仁勢物語の鬼一口
三年八月武徳殿の宴あり鬼食
是則大性く
一ちこのそろ 日本紀
一冊 をこのべーみ
冥濛 ボウモウ
ゆやい ひまよいのものもものすごき
ろあり
一わされごと 業
一ものもちに 注華
註云 又菩薩摩訶薩不應於女人
身取能生欲想相而為說法云
若為女人說法不淨齒矣不現自
膿乃至血流不親尊況復餘
一おほんれあろ 髪のすそのそろれ
あろ 称く
一冊 おほんその 出家
いふ上のなるひあるべし。

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

とゝろひそうのゆ
一夏のつとめて 名残あはれにつゝしあるし
一そのあ をろかなるうへ
一おいのゝく 老
一をいこれいゆして あひて忘おと思へ
一をのゝ 已ホ 一おさきの川 奥中
川又奥も川名処
一おとり 侍者 女とも或は 許
一おとろび 性也
一をそろひ 高なひく
一おかいま 大君 ひ性
一をのれ をされのこと
一おいまりく 処
一れおりんそう母 ゝはと
又れやう母ところもあり 子のきび
ゝろそしつさ記

一おりんべ 贅 古今いべと云大堂 舎
一おひれ 老拍 経角よ巾園 桑
のゝもを考れ母ごてあり
一おれそゝめう りけゝろく
一大君けー さ私なる心
一をちろくり 百ふ及
一おれろけのび 不サ孫

わ

一わりなく 河 寸別日本記寸破
一わづゝく 処
一わさぶれ わり高
一わのそーき わう我そいあよ
ゝゝめどろ心く一わざ 奠く
一わづん 伊幣 諸伊幣 冊るのれ時
今仮出一張ごこく 錯紫 窓のれ私ゝり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

亜に宮く。あつさ堪へがたくもの
なり。暗も明記云。あをハ元ハ已亦
張とり並く用ひそ。海よおとろ
ひくあつく
一わらうわらう 哥の早ト
一わらハやみ 鹿病 瘧 月之世俗よを
うらこひつそわり
一わらハ 王家子等倫王縁よ
て。姓と不賜 平人く
一わう方へはなり 令燃まうわり時
体見とる屑ま
一わうきりれい 幼者形不敲老者躰
す。温悲端子寒れ併入鬼中辛。
ふうをおての法つ
一われのはくをり 出淺河海亮
鳥ニ妾ニ賢 御門首よ入あう指よ

つて。訪王の額よさう法のて家の方
よとも母さ法ふく。伝すありいう
一わさうでおよこうのべく おやけよ
いつくまうびて。浮く系舎しへ
くれていとの心く亮。難居せるへのか
くへむありくといこうとのとよう
たのむく。致仕の表なりて。源居の
ーとアなどうつうこえありう
くいくれん。りみくやましをはぐう
ゆく
一わさいうこに を
あつくい。海乃あるく。亮鳥一本よい
きうこうこれありきうへうこうき
ハ。おとひあつ母ゆく。拯みのうくあへい
こことをよなうるく
一わつくいよこうこうて。むさうの心きあ
らあ、海といふうのさとい云心とこう

一哥(ウタ)ばかりよろしくとゞめて、をこなども
まじらはぬ、この法師ばかりぞ、別の様(サマ)を持給
なりけり。それよりかうけく、しき中よりこの
ものゝ
一ひろとてくろうに一くさ、京へとも
まじらはぬ、この法師ばかりぞ、変りけり。
ておいぬべくおぼえしかど、その程と夜
そなりしてまうでにきこえしかば
一ひろあをき柳のくさぐきでいぐさ
ねのあこめ、あをよのうへのきぬ、柳の
くさぐき、紅梅(コウバイ)のあこめどもさゝ
一ひろまきえに書(カ)きたるやうにぞ
よろぼくしてゐたりける
一ひろくもゐ　本朝(ホンテウ)にも延喜(エンギ)聖代の
時、菅家(カンケ)を左遷(サセン)しまうでゝと
いうに、松(マツ)ばかりを
一ひろばかりにて、童

紅(クレナイ)おさえびけるこの心
一王女(ワウニョ)にて、王孫(ワウソン)をとぐ、朱雀
院の皇女昌子(ショウシ)内親王、今泉院女(イマイヅミノイン)に、世
以(ヨヲモ)て稱(ショウ)王女(ワウニョ)」とぐ、九王女(キウワウニョ)にぞおはしぐ
姓(シヤウ)をもぐ、ひけること、女(ヲンナ)院(ヰン)の
あり
一ひろのすいぐ
ぬをくやしくおぼえ、有二五家(ユウゴケ)髄脳(ズイナウ)
又演成(エンジヤウ)抄(セウ)の、筆(フデ)七病(シチビヤウ)喜撰(キセン)式(シキ)に
出(イ)づ四病(シビヤウ)、孫(ソン)姓(シヤウ)髄脳(ズイナウ)有八病(ハチビヤウ)是(コレ)をも
一ひろさゝひろりて、ろけひろとて、内
蔵寮(クラリヤウ)にある、内侍(ナイシ)所(ドコロ)に、東階
のもとよりくおりこえて、母(ハヽ)屋(モヤ)簾(スダレ)
動(ウゴ)かして、後(ウシロ)の御(ミ)前(マヘ)おはするれば、不詳(フシヤウ)
ぎいと高(タカ)きそのうち、御(ミ)簾(ス)の
もとにて、机(ツクエ)
つゝて、歌(ウタ)を書(カ)おすべくて、十百千

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

おやうそくく給よりてるひて繍
賜こそ哥とゝしてゆうゝくゝり
一わらはゝ　　髪ゝ
一ゝゝそゝゝとふく　皇麞平調ゝ
一りてさゝきゝゝ　四胖天気聖
清緑掬陰合泔提平白氏文集
一わらくに　よやくうゝ心ゝ　和のそゝ
一哥ゝのゝん　ゝやとの　あのさみさい　ゆりのゐ
りり　まのあうとゝおうまれ夏注
一ゝ九曲り結　雲の当日ゝ
例多ゝ源氏のけ賞ゝ若葉ゝて
狭ゝ法ゝ十二種若菜七枝の若菜
河海要
一哥ゝ葉ゝ
の景ゝい海を教ゝてそゝ法ゝ
ゝおなれゝくゝり小松ゝ
うゝ法れゝゝれゝゝりゝ

一ゝれのあうとの　義
一ゝゝけゝゝて　玉ゝけ　ゝく手孫ゝ
一我云の外　ニ子宝外の心ゝ
一哥ゝのゝや　音を気りゝめてゝ暮
てゝけゆゝべ夕ゝりの名までてさ
哥ゝゝめゝそゝ神い柏ゝ夕ゝれ
りゝべ　一哥ゆん　ゝ
ゝうんまの命をとゝつけよゝゝぬ
ゝこゝめとゝゆんとやゝなり
一ゝさお供ひするきく　菊の花を哀
よめてゝゝ云のゝこゝゝさをゝめ
てきくのゝれよゝゝなり後撰
秋下哥　詞云ゝもゝ
一ゝゝ　武蔵のゝよゝゝ
一ゝゝ心ゝもゝ　美ゝ嫡女ゝ

ゆゑいはしるものゝ道をとく
一ワさこれ 佛のそこをみてうふしの用
一ワさとのこゝろ 嫁娶のそていはくし
てとの心なり 一ワるの霞の根
くるあるなり 一忘るまおもひて
小堂栽萱草 綿忘憂
一ワくん 会のうなり 椀飯
一ワつまやいのるへ あつま琴とも云
よせあり吾妻とも云へなり
一ワをこむさん 唯識論曰 云何
慚不顧自法 無愧拒男善為能
障礙慚生長悪行為業 河海抄
法作我懺愧之 一ワをくて 月の
ゆくあらず あく許と云心得
一ワろうさ 急座
一つけなり 手紙ニ 源氏抄

一ワろつめ 虚偽 うそけなり
一文哀 空絶 絶女の出るなり 門
乃れ行をめしうるあつひ給よ
くなるよりて 文哀といふなり
一かんなるめ 云卿くなる大臣なりの作
あとをりなり 月卿めいそも云卿之
一かしはさ 露をとも云 露のを
あり 又冊
可畏之 日本記 恐心なり けんげは天
まれは影なり 一かきりとて いう
ゆかしきこと 性のうさ命をいまく
ことの心く 一かくうつくしもかく
も 禁中まで文哀れともうくをあ
らんとゆうんそんとく
一かさゞけるさりしこまこもゆ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

ありなをれあらやうり
一かくしつて 源氏名
一かくるのよ 助動詞
一かこしゝけごとあり。ありよりくく
うらごとう 擔ちいをくもろかり 誰
うしまろ心なり。サ変いさゝうろやく
一かろみ 河記念抜加信 文集
一かろやうやと 文衣のうくこに本さ
人よ返りあれとあるもの
のこしたう可きをゆり
一かんざし 金釵
一かくろいくし 手風情
一かんくん 勤くろく同くんぐくありく
ろぐくく 後べし
一かやくひの文 二条院の北眼上東
内院のれ入内あらて 尚侍よゆまし

とくゝとより業花おとあり。当代の
るもさう妻けおぬよあり
一かさのサお 後くおれどもおおよ
うるのかおこそありぐその人ろきりあ
ろこのこおりき。光源氏くかさのか
ねり 風ば代のおいちくひどもぬ妻ア
あくそそうかるり当までけ一条の
序く 一かさこと 頭
一かさこと 庁方 庁座
一かごひうみろうみのり
一かごうのり さやうるゆく
一かこうかこし 上の上やいかのり
一かれご うあれごのり
一かやうびうやくろうゆくと
ろうやうあくるり
一おとなさるもあぐ一うごあく

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

一からしてかへり一かれもあることもた
ゞあるこゝろをいとめてあるゆゑり
一かうらん　棚手こ　おぐし　ぬきうり
一かひなきもの　はゝのあまうへ　髪をとり
あてよあとへとり　中川のみちよゐ
よひ　清水へまうでとき　つゐもくきこと
えいり　その男の　美濃　行澄　あま国
のはゝひよあるゝ　ふぐ　その妻のまゝ
をとくとりこれい　等をあつめてある
やうにて　返ことしぐ　それよりほかの
ものゝ　ひとりいふ　ことゝいふことなく
あてあとより　等あるの人のもの
嫉妬
金葉
楢のこあてこまことはくあるのと
とゝろもとゝり　和くでなき
一かうとこ　垣ごしに見　おこしなのよ

ころろをいつまでこいつゝり
一かの川の　且くとくとある日あり　一かよ
ろべし
一かぐやひめとみの帝
なることを門をあげあつしける　小放
のこあるり　一かさ城をさゝげ
して中門のうぎあるべし
一かこかなることぐよ　序帋　真帋
いふ詞ゝりいぐくあるもくるいあを
夏るり　一かづきの弥太
ユをこしてづきの弥こ云也　弥
楊をうゝ作のあり
一かべの中かきりくし　光毛詩七月篇
云　八月在宇　九月在戸　十月蟋蟀入我床下
一かこうし　囲るり
くやうゝ　一かき　蹴　やりくまの
ものよあるり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一神事　九月八朔日より内裏の御
まへ三十ケ日の御遊よのつねの
ことなり内侍所のごさとなり
一かぐら始つる　うたひ出ていと
おもしろくいとおもしろくあはれ
なるものかぎりかぐら
かぎりは皆人寒の陰陽の
力やし
一　西院の帝の御時
詩王の素行あしく　名こそいとん勿論
なれむしろ太秦王と云王ことつくし
き女をおもひかけをし　異国の王子人
ともよそをえんす　のそきけるに
ほどに此由傳奏をもちてのそ
なくことひろもりて　いかいのこと
よあつりて世七万八千
百里をさる
つくしのあり　その御王そを

[illegible]

て　古酒のうこをもちゆすて
又の王なりひよ　異国の男人の妻
よりおもひくとりつくしあるる
ま　吉祥天女の女御よりうり
潤陽院殿の八条の女君も王
九妻なれば名こいとんよお遠
くうり　一かこのつくしく
そぐれる　おもしろきものは髪
とどそこそこのそとりそこ
ひとり　一かたいあくとり
なして　ちよと結ひてそのあく
めるる　一かんばし　あさ
ましきいんばしをねどもら
みのあけちこそべうつくしくそ
あるり　一かやうなるのきる
し　古酒のかはりにして　きるし

ひさしき空のきこえもおいてさあるべきわざにあるべきものなり

一かのまことあくごよ　昔の尼君よ。源氏のひかりあるよの心ざしよのこころ。悩ぶのこころのひとつ裏とをやしかのこころをを　源のかくしばの楽しめてさ給へるよ尼君のこころをいうできく給へるよ尼君のこころんーのこころ

一かのこと給ひよろん　然のひ母のこころ

一かのやこころとをひかり

一かびすく　源氏のそひくの君のこころ

のくこころ　びすくいうぶことをひかり

十月　こころのつきみ頃

かりこころのすぐこと　乃裏こころりとも

もよ退(タイ)きのひかりきめ源あるつ

れしいづくこのそこの装束(サウゾク)あるよ

一哥

かのつきそ　そ

すんろわけくこいつよりもてよつさ

くこぐろんるをこまりこぐろひろそ

ひをこぐろくおいこめをいつるり

つそおいこわくこ八撥(バチ)ろぐの源氏

の時(ショウニン)の形(ギョウ)者(シャ)　わこいへい威儀(イキ)師(シ)磐(ケイ)

をおるこひこ後い源氏をや学こ

こをるも通びこるり

一かこもひくくもこもえ

給こるや

一かこのこりびし

もこりびくこぐりで回るやし

をこ修(シュ)行(ギョウ)のこり

一かいるそ　人かすこひのやく

一かこよひ　あこるれくんのこと

るこるやりり　一迦陵頻伽(カリョウビンガ)聖(ショウ)

主天中天・迦陵頻伽(カリョウビンガ)声・法華経(キョウ)二

迦陵頻伽在壳勝衆鳥ニうく或加樓
賓ま云ク 伽陵頻者梵語也迦陵ク
うハこの中おうくりゐくあり
一弥あ〳〵ゐめでつゞき 大陵去いと
おそ〳〵ゐてこゝいやて同き迎ゐのち
井の約まよ富小海のけ自ゐのは猴
の親主のセ衆まて葬まいき也結
へりし はぐゝりのるゝそるくゐし
う万くゝかれぬくゐゐつゞりき
けゝくちひりやゝようけくつゝ
もゆひゝうで心の非めでくうりを
ゝけゐ
一かいまろ葬基を
位のやうよ立免くるこゝ後いのゐり
姫代ゝ経ニ固く てちくのゐいゝるも秋
ゐの絶法なよ云々七人の内有ル第三
破三人経代三千六人ゝうゝ此物

りのうゐをいつよゆゝもよせるゝ
のゝゝ輪墓の帰作て葬基のと
よ加立めぐるあり
一かゝゝのゐつゞ葬のうばゝくゝゐ心に
の言本の校ともおりみはくうゐ
ともくゝゝ ちり遠あるやをあれいこ
此い学乃りみちるるべ
一初んあちめゝくちゝれ これ院をす
むといつり 一 かさあてせでり
御ゐとをゝくゝくるゝ面といつり
一かでゞり 輪福をくゝく院を作ば
めけく学ば府や作テ安府の異
ろく檜扇よあゝび
一がくゝゝよありくん 宝面なよ
くゝゝ親行なゐいゝへゐゝゝいび
けんとゝ面法作もゐやゝ第別

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

の女ろくしの後。雨天の雪ーいるとき
より。又みそかの卓文君。白頭吟ノ
をつくりてあれば。可ゐる相如を思
ておくれとひくるのこ
一冊かくれるさおとうしき心よの。深き
心こより　一冊かくなるこいろ
いさぜ巻のそんのいれ物こうして。
薬系なし。但天暦三年三月十一日二
条院花宴。陽成院哀。同月十二日。小野
仁寿殿花宴。各有舞妻。即養春
賞翫又ゆかり伶人こうりのて。後この
歌ハなるこ。けれ海のあるし。面れ
もあれがあるよりあるこうるのし
あるこ　一冊しもそこもの
らん　燻炉之遺逸なるこ毎日よ
感じてこのこ。涌しのこうこん

つるれ
一冊こうのぎさぐち
巻位ぜの心当り。ほ天皇ばうこ
あるひ
一冊こうこうこめよりをこうの下位ま
こもこうり。ぐぐこの上簡のこるり。
行被。夜のこよ巻ひこ秘り
一冊け　豪家也けんよりひると云
ゆり　一冊れとぐんう
後ぶのそこなのするれ夜。花ける
年の雑芸なり。技術のも怪のひ
そうれどのこんというの。一負とを
名なく。幼房のお盛将曹府生を
一人ばうそめにのこうこつ
くとゆるり。職よりて修易とお
うらぐりありそ。先生のあひよの
けのめぐにや。こおのはよこうひ
く。二人つめーりんとうの後多

とつかふり。假令納言の末なん下ハ、た
いふらいの番長一人を清おく人すて
ちくの次第をゆるされたるめしぐしたる
なりそのうへよ将監の時ハ将監
ね曹府生とて又一人次第具すると貞
こもりの次第とも云也をなど
のこもりく蔵人のそうら蔵人の将
人のね監をもそれと貞よ兼ぬる
すい。例付かまるく又行幸の時ハ左右
を衛監曹ハ左陣よ供奉しけるそ。
ただしの貞よめしまとひけるも
みなかるべけ一般の詞かなされ華之別
ふみを記すべし 要傳云 此物語乃寓言の
称とめづ源氏君をあん為に書
出給ひし詞くさ説 一うさあう
つふ物本人紫式部 一冊 かきしけるぞ

与学 八十郎へとふ。あまこめくらよあひめらく
とく清涼つり 御前で。なる客の前也
白ねてくしまるよ似より引き歩よ也
一 かくゐ 遺骨のこと
一 かうぶりをさゞ 髪上の時脱けども事
一 かりくまう 狩衣之
一 かんづかさ 神司也
一 冊 かうこうさいハ あるしの杉とハ、鶏清也
あるしのあさしの也
一 かうバまでハくく 最多辨行也
白ハ、ねばまでハ 漢のまあり。幔の色よ
て中流れ 辨と云ひくりあつく
一 かけまくもかしこきあまへまとて
宣命の詞 掛畏
一 かものいけるまつらへんのみれね清世へ
孫王、それハ年々すべし 孫王 為

斎院ト御眞子内親王 文徳第三中務卿
仁和五年卜定 源主例此一度ナリ仍如此 惟彦親王女
くもありけりとなん 然花鳥委
一哥 なけきつゝも 秋もわかぬ心に
ゆる心なりおさなかなり給ひけるを
どあれど
一 かへさへ 擲遣之
かつめらうぜらる 嘲弄せら
一 かつらの木の風 光る君
をとこや
天稚彦門之湯津楓樹 日本紀
一 かくてのく河 楚辭原のまれなれし
定をいつれ屈原をよこさるべうれ
一 かとりのなほし 河 縑直衣 たとう
とかしき緑絶ときめし緑之絶は色を
平絹の無紋之白穀のかとりもいふ緑
絹なり
一 かんのきみ 朧月夜
弁 おほくのもおほせとかめ世にも

一 かちのおとよ
鴈櫓とて鴈の声ににたるをいふ
あまくはりたちもきこえ
一 かりのつら ゆらうつらねてつゝきしまく
ありて或海濤越とて 昇
るへし雁の門のよるにたちさるを
くあまくりといふ
一 胡のよりありてうぐ
へぬ 胡馬嘶北風 越鳥巣南枝
馬へゆし 胡のの獣と なり 北風によりあゆむ
まうびい 王昭君をまつもしくいまのなく
あし
一 かれくといふほと 絶
秘曲 嵆康が華陽の亭にして 広陵散ハ琴也
人よりあいくいふ事ありしば
いふくしの冷備の姿なく
一 かのくのあの所古風云 識貞全云大
納言二千人至是全の文のしくゐも

二人の舞人はうちよりなれば随身の中を
くらぶべきに宮木年随識の内も三人をえ
らびよ権官あつべきなり。さるまれ宮
のみをえらびつれども権のうちをえらべ
によりて源氏も権大納言としられ
ゆゑなり。かけは正八人。将十人よみなれり
一かつのはよはけく従りの人をかなり
一かゝくしかくへとづく十列とは東遊の舞人十
人あるはのりて。あそびをもしいはゆる
く。稲荷の祭。関白の春日の祭首
ほてあそび集りして。社頭まで乗る
と舞うくけば馬場まで馬を乗る
なるにありしかの時はいだし近の官人
二をとつく事。八幡臨時祭などよりなる
上の雲客舞人より。源氏の君だに
随身にしてなも舞人十列と見し

給へるなるべし　一かはらのおとゞのは
さいとまゝびく延喜二年八月九
月。流童殿于東左大臣辞左右に。同月
に童六人為随身。三年十月九月勅
賜左大臣近衛府生各一人を為各三
為随身。位儀二童子を。今案わ
いはゆるにゆひて。すなはちすぞご
のましゆひはりすしいえてあれども
の装束の色に服見なり。水干なく
やりきぬなるべしや。随身とは官
らやなぐいをそへばきみや何もなし
くの流擾とよばれし。此堂童は六人
とまてなり。それは十人とあり　又
勲公。童随身給ひ。国史などにも見
えたれども装束を着るも
あるべし。此物語にいはゆる即ち擬なり

べし　一條は祇
園　一かうりそやの
きど　唐寺　嶺　姑射　刀自　莊子
姑射山　いつきもの　あるにあらず
一かさつくるあるく　とりはくん方のあき
なり　此時かの石ぬきの名
一かんやごにうのさ紙ぐらいして　畔
ぐらいして　強くあるべし　紙屋のへ　紙
すさおひとえのりうすめさい　唐綺
うへのひあふ　一　今　かさねいろざりあり
て　紙をはぐそれぎぬのやう
もとなくうひうごくそ　首ハ　領
多分　去ーや　上の句よ　中納言まさ
ゆきぞ　ぜ　此世　いふへあるしろ
き紙をとへのみへあれどこころの
ここち　廣乃はろをこめや　指遠　才丸
云　廣　爺云　紙ありよ　お姫馬ひけ　云

ありり　一　おこうの　信よ
くと云ふことろへ　四圍　ありり
一かつへようざさるあるを　畔　滋賀
堂あへ　法を　大やへようへの法よ
や　又　桂院　源氏のありしとあよ
や
一かりのはそ　ひま
そのれ　裂米を　今云　歌　信れ　夜
ふへ　一　かしおへそよ
女房よ云　柯子　先毒云
一かごひろけさせ結ひて　畔　秋好の
いへいまて　源氏の工門も　盤　昌も
んはと　一　神さびよけり年
月のふへ　源の久へき　云　篇　のあと
云　神用　又神宮　上久　もつへあるへ
久　畫へ　一　神りざなへあり
蔵　きへくれ　桃　墨　文　その筆はり

てゐり　一所かさつめく雪もよい雪のあるり

一かつ〳〵の下風　氣の裏よ桂りつよよそさゝやく　一所かけさやいりみきやいとくそひりけさやいとくかゝもの袴よりているくて除夜のこてきとんそとや若鶯うそくくり

一風のちく〳〵けくすこし　文選

豪士賦序に落葉俟微風汉陰霊乃加蓋寥風の力の内右辰爰心中歓驚とねいて成とゝや今ハるよやしてもほ氏のちく〳〵けよきやを云なるべ

おとけんる不の成とゐり

一風のをの何よ風生行九夜窓間卧月照和時墓上行朗

かけていくいうけてくぐいひくね

ゐり羅のうぐ〳〵を月りけのいとなぐ〳〵にしをゝ神よりけもほよ亜しこしなよゐり

一かいりよきをぐてゝ河撫練い紅のうくをいわりりのにきめ着てやいぐき垣畧しくり花撫練いうすき紅のきぬのわりくるとあをそ。あゆびあるくいか神とそゝや。後ぐてゝ。

うくと着きめとべ着くべし

一かくりや賓一かくれくうぎやうきのくくさ唐八音錦目本ももかりく唐のかりくもの花今業白地物を東京落とうへく

一かさねのうちさるべ弄うちさいかるるきぬべひとくとおいきぬのトり

必着べくもあらぬきぬどもあまたとりそへなどするなるべし

一かつれん新羅の地名くにとも称す

一かつごしの世くにまでくる花今案るに巾子の冠ハこしをるくきてうしろへ折さげて花をさす

一かつ人ハ下ゟ花をとりて後ハ古位尊人のうちへ花を着ハかつこしハ花ハ着ぬ物なりて立ゟ下りてとくとくとくとくと急ぐ心をいふ

一風ふけばの歌さゝ蜻蛉日記ニ云

ふくよりてゆきて帰よて いくさゝ九州の境なくて立ゟりてあしき中ゟりこゝ結ぐろく 船ハ遅き事名ゐめべし

一かめれうのことを不見ハ遠来不敢飯童男童女舟中ニ

一かつりこゝよ喜春ゟ呂ゟ反音ハ呂ゟ律よりつゝを云喜善き事い黄鐘調のゟゝ平調よりもりて引ゟゝ下ゟ他黄鐘も律ゟ拝ゟりこゝ律ゟ呂律ゟ中や呂律ゟ中

一かつりこゝ結つりぞゝにわぬ神ゝ

一かつへやく大日とゟゝ

一風の音ハよりぬく秋風のゟゝ平調ゟ次ゟ盤渉とゟり

一かつぐさゝうぐ揚ハ花のゟゝ立てゐる文勢なる事や古今よりの揚とゟつゞ

一かつゝさいとゟもゝ

くゟゟゟ日本記ニ云天照太神踏ニ堅庭而陥股沫雪ゟ沫雪ゟ会集うゝさ雪やゟゝさゟゟり そ

さのをれこその悪行と天照ら神の
いり給つる時、ゆるしなのりし給ひしかども
今をかぎりと思ひ給へしかば
心ざしのふかきをしるしにとて
ゆく
一かんの金 内侍殿
よのり給ふ。命よりおもくする。面影のかる
うきなみぢ
一かへるやいなや 雄渡
み給ふ
一哥 かりがねのいとひや
九月なかば世間よりはじめて十月よりは内
まいりとけざやうにあまたゞ九月たち
りよ命をうくるといのり
一かの御いとざるなりける浦 家物よ婦
合の野うちのひは川をわたるとて
源あそんのよみ給ふ

ぞも八重垣乃中なり
一かへしのやうにて 文ふみ
一かりがねの 聴よ。うもとりうもとる者
掛ゑ
一かへし 花葉
の葉うらも也。思ひ掛花。秋い菊 紅葉
八名方 一哥 ひとゝせあり月ゆく
花 月日を歌にそへ給ふ。鳥も虫も
かんのこと 假名ほん。行はなれて何
人、心ばせ世間覚。往古の和語八万葉百
本記の号の如く 一名のうへ かへし ほりあ
ほりの。還迹けふさく句也
一かへしても 多くのあひだをおも
桂ハ女方のりて文章生ありて
をとうり。播磨守政岡山庁玉ノ今改
課試乃教之変ル事凡そ

一 柴の風 博士ども 文作 あるや

一 弁 五月の九日おはりの日ばかりに 六条院

一 行幸あり 康保二年十月九日 村上天皇 行幸 朱雀院 に 例 をう

一 かへて 若二 一 かへ 雨 降 栢 雨い

一 朱雀院 あり 漢武帝 栢梁殿 に

一 うたげ うや 東 文 作 出 ども

一 かへし のさい つくり 出 て 菊 を

一 かへし 一 つくり 降 ども

一 よすゑ 一 かへし

一 くもり 一 紫 皇恩 河 延長

六年 同 十六年 四 紫 皇恩

万歳楽 あるべし。 四 紀 よりつぐ

一 かへし 一 ものがたり

一 くさ ものはかなき 云心や

一 かへし 一 歩 ゆき おはせね。それなど

一 よみ ひく 一 かけ 物 も 勝負

のりけあるべし 一 変 石清水 御

一 弁 栢殿 四 条 栢殿 四 条 栢殿 自 社 来 の 日 の

一 かへし 一 ものがたり

一 かんざし 神 賀 に

一 かへし 一 あるね 今 の 来 一 つ り

て よそ 一 ほ ひ と の

一 かへし ひかり の もろこし ひょう

琴 の 声 より 宝 よ あづり 世 よ ゆる

一 かへし 一 ひ 綾 よ 一 ほ

一 かへし 一 ありよ 綾 よ 一 ほ

な 一 ほ

一 弁 かへし 一 ほ 来 守 の 神 と の 右 衛門 督

の 変 と 一 ほ 栢 来 守 の 神

を 一 ほ 一 ほ 一 ほ 別 紙 あり

一 かへし の こりの こころ 唐 織 地 に

小殿ごもり
一かうちきばかりなるハ
一かんまち　吉日
一かんびの祈り　会
るべし
香とそ吉日ひと仲間おりまし、
世吉日あり悪日の物忌や中ぞらの
有氏なる縁　秋ぬの中之有　古殿
仕の有ニ中之治ラ一之
一かいおし　うそ答あり
一かさゝめべき　おやこ
一かさゝへ　踏哥九号以八切者代する儘
一かさあり之て　おと帰　よいあしべ
ゑとうけとあらく述く
一かつれびよくびくよいあしびや　為
人のお法ていれ別よろしへうう乃
びよくづるのありしとろしき
ひげ忌の帳之の為中ま一之ひ

しゆうあり　一かんなるこゝ
一かんなるおぐ　あゝのうちゝ
一かんなるこゝく　醉醉ホハたのまるり
一舟の系よ其例　あるやや村二和記録
私元年国三月十一日為墓舟ホ参へス
醉醉系葉人宮ゝ又河水藥ニ
一所かさ一ある　うさ
しあるとゝ仰も　ゝうさへの為あにあ
お花乃弾てよ為とひあよゝうのぐし
一かせうして　風心うとのやく
一かづゝひび　髪男　髪無　おもぼゝひび
一かぎゝと　法ほれ安　あのぐうぼをり
てとゝ有一為の安や
一かゝるぐあよ　除抜く
一かべの中乃ゝうびく　壁のうゝよくん
作すとゝく　遠壁暗蓄安限思ま

巣ノ塾寒燕珠能飲
一かいせんらく　湖まそほ　水魚の石
一冊かさくり　芝明日蔭のごとくかくりのごとみごりあれば日ぐらしめ
めくく　一かくく　勤勇
一かやくく　うゐきかあり
一冊かれ島　婦人よ似ろうくいとくさ
うのやくく似ろ鳥くく壱ろくあ
ふくおろろの如
一かくごんをし　庚申
一かくさよろうくん中考もおろひ
くき冊ものやろうくんとこくさこあ
ぐくく　一かろおとりみお
ろう猿のまも芝のなくひとく
一かりけろ　れやをくろゆく

一かのうくくき珠　若有人受是菩
薩冊かりまう　能消災禍　讃美者是人功
徳　如来常在　菩薩運芸香　香気毛孔皆
出　梅檀香　法花経
一かかのさく　降魔相　不動尊念怒
乃至一念　あるこころのや
一かさくぎ　猶く　変ろくしい強るとろく
一冊かさくく　天雲　雨雲行くそも消
くそあさくの如
一かくこころれくりういくく　お雲守強
ことせあり　仏経文
一かしらうくあべ　ほく此衣岩うう
髪のそおくべ芝のけ当ぐらもを
つ里めるゆちをんろく
一神るぐ　神ろよ心絵　春ろべし
一かざりそと　一生専業

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

856
10

一ふのまざれ 地獄(ヂゴク)のかみねをふのまざれ〳〵ろ〳〵 一かれと 不(ス)かれ雑(マジ)へ

一かくさ〳〵 学生(カウセウ) 一かし 大やけの

納言(カウノヲン)の勤(ツトメ) 一かぜ〳〵そげよ君

にもおさあげつべき 文選(モンゼン) 采玉風

賦曰(フニクワウカレヨウ)壁名伐木(ヘキメイバツボク)拇殺林莽(ボヲヨメリンバウ)

国立国会図書館　　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用